ドライツ

沢屋鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドライツ

【Nコード】

N5213W

【作者名】

沢屋鐘

【あらすじ】

ある日、森の中を徘徊していた主人公は熊に遭遇。命からがら逃走を試みるも、川を渡る最中に川底に足を滑らせ滝から転落して死亡する。という夢を見た。しかし、それは夢なんかじゃなかった。そんな感じで、どこからともなく湧いてきた自称神様が、粋な心意気として主人公に対して死を宣告する。そして、あれこれと巻き起こった騒動の後、綱渡り方式で異世界に転生した主人公は、周囲の異常な環境や変わり過ぎた自身の身体に戸惑いつつも、平和に日常を送っていく……つもりだったとさ。かなりの不定期更新で

す。内容がシリアスだったりそうでなかったりします。

プロローグ くとある覇者の結末

始まりは、一体どれほど昔の事だっただろうか。

数十年前だろうか。

数百年前だろうか。

数千年前だろうか。

それとも……

いいや、きっとそれ程遠く離れた頃の事ではなかったのだろう。

時間の感覚が鈍くなってしまった私には、正確な時期は思い出せない。

でも、あの時の事なら今もはっきりと覚えている。

そう、あれは

”王”が死んだ時の事だった。

……”彼”が死んだ時の事だった。

今なら……今だからこそ、分かる。

あれが、全ての始まりだった事を。

この結果を招いたものだった事を。

そして、こんな結末も……恐らく……

私はそんな事を思いながら、まじた 瞼をあけた。

そして、今の自身の状態を思い出して、小さく笑い声を上げた。

はは、ははは……馬鹿だな、私は。

私は、血溜まりの上で倒れ伏していた。

両腕を失い、片足をもがれて、醜く転がっていた。

”敵”を前にして、どうにもならない状態になっていた。

たぶん私は、情けない表情を浮かべていただろう。

……だけど、それもすぐに消える事になった。

私は眼前に現れた影に対して、問いを投げかけた。

アイツも、こうやって殺したのか？

朦朧とする意識の中、その影は……ゆっくりと頷いた。

そうか、それなら……

私は首を持ち上げ、見上げた。

目の前には、透き通る深青色の巨大な石があった。

貴様は……精々……

そして、巨石を背にして佇む影の主を見上げた。

その影の主は……

なおもこちらを見下ろしているソレは……

私を罫に嵌め死に追いやった”敵”は……

笑っていた。

心底満足した笑みを、浮かべていた。

私はその光景を眼に焼き付けながら、言い放った。

後悔するといいい。永遠にな。

そして敵は、笑みを絶やさせないまま、剣を振り上げ……

裏切り者には、それがお似合いだ。

私の命を絶った。

異世界大陸イル

そこには人間、亜人、魔獣と呼ばれる者達が住んでいた。

独自の技術を生み出し、文化的な適応性を持つ人間。

先天的に備わった身体能力や魔法の扱いに優れた亜人。

魔法に対する抵抗力が高く、亜人を超える身体能力を有する魔獣。

そして彼らは、常に敵対し対立していた。
本能的なものなのか、あるいは決定的な思想の違いがあったのか
もしれない。

ことある事に小競り合いが起き、かくしつ確執やあつれき軋轢も絶えなかった。

しかし、彼らの間には決して大きな争いは起きなかった。

なぜなら、その世界には一匹の龍たつが存在していたからだ。

龍は絶対的な力をもってして世を、人々を統治していた。

空高くから彼らを見守り、闘争や戦争の”芽”が”樹”となる前
に摘み取っていた。

何千、何万と長い年月の間、彼らの王として、生物の頂点として
君臨していた。

しかし龍は、ある時を境に、姿を消した。

予兆も無く、兆候も無く、前兆も無く、唐突に世界から消え失せ
た。

当然、龍の統治していたそれまでの世界は崩れ、人々は酷く混乱
した。

変化についていけず思考に耽ふける者、龍の不在に嘆く者が続出した。

しかし大勢の者は 歓喜した。

『邪魔者は消えた』

『これからは我々の時代だ』と

そして、彼らは武器を手を取った。

……そして、現在。

此処には、絶えず闘争が起こる戦乱の世界だけが残った。

ロミナ・セル・ストライズ『空の覇者』 帝暦五十二年

登山と幻痛

木の葉が舞う秋の登山道。

朝露に湿り、低く垂れ下がった葉を手で抑えながら、俺は歩を進めていた。

「おかしいな。まだ着かないのか…？」

愚痴を零しながらも手元の腕時計を確認する。

長年愛用している完全防水仕様の時計は、朝の8時の時刻を指していた。

思わず溜め息を漏らしてしまった。

「……………やっぱり、道が違うんじゃないのか…？」

既に山道を登り始めて、約4時間ほどの時間が経過している。

道を照らす懐中電灯は既にザックの中に仕舞い込み、登山用のストックも持っていない為、両手は空いている。日帰りを決め込んでいたので荷物も最低限の物しか持ってきておらず、ザックの中には財布や手持ち用ライト、タオル、昼飯用のコンビニお握り、スポーツドリンク、軽いスナック菓子等しか入っていない。服装も殆ど軽装で、ランニング用のシューズ、長袖、長ズボンといった感じだ。

そのおかげか足取りは軽く、かなりのハイペースで進める事が出来ていた。

…そう、出来ていた。

出来ているから、更に疑念が深まる。

あの雑誌に載っていた情報の通りなら、とつくの昔に目的地に着いてる筈なんだ。

このまま道なりに進んでも、遭難する事はあっても、辿り着くとは思え

胸を強く殴られたような幻痛に襲われた。

突然の痛撃に、俺はその場で腰を折り、荒く咳き込むようにして息を整える。

「……道は、合ってるってか……本当か？……そうか……なら信じるけど……」

細かく伝わる”熱”の具合を頼りに『この道で正しい』という意思を感じる。

相変わらずの乱暴な方法でウンザリしかけるが、今のコレはこうする事でしか意思のやり取りが行えないのだ。…モールス信号のよくなものを解読している感覚だが、近頃はこの方法に慣れてしまい、ある程度の会話が成り立たせる事が出来るまでになっていた。

…身につけたは良いが、実に情けない技能だ。

俺は再度小さな溜め息をつき、勢いをつけて立ち上がった。

一向に見えない目的地を目指し、更に登山道を進む。

無心で進むのもアレなので、俺はしばらくの間、適当な思考に没頭する事になっていた。

先程までの様子を、第3者が見たらどう思うだろう。

一人で歩いているのにも関わらず、誰かに問いかけ、納得する。

拳句の果てには勝手に苦しみ出して、地面に手を付き、呻き声をあげる。

警察に通報はされないにしても、救急車などを呼ばれるに違いはない。

黄色い救急車が妥当だろう。

胸がやんわりと暖かくなる。

……この反応は『同意』を示している。

俺は、反射的に自身の胸を殴りたくなるのを、なんとか堪えた。殴ってしまったら負け……以前に、キチガイ確定だからだ。

それだけは何としても避けたい。

既にそれに似た何かになっている気がするが……きつと、まだ違う。

草木を掻き分け、ぬかるんだ道に構わず、前進する。

この胸からやってくる痛みや熱は、”あるもの”が原因で発生している。

その”あるもの”の正体は未だ良くわかっていないため、俺は”妖精さん”と呼んでいる。

妖精さんは、2年前から俺の中の何処かに住んでいた。

そして体内から度々乱暴な意思表示を行い、強制的に俺に命令を下しているのだ。

そう、まるで体内に巣食う寄生虫のような存在で

「ハッ！！」

失いかけた意識を取り戻した。
額に浮かんだ脂汗をタオルで拭き取って、移動を再開する。

妖精さんは俺の命の恩人だ。

2年前のあの時、死にかけた俺に救いを与えてくれた。
それだけではなく、なんと崇高な啓示を与えてくれたのだ。

最近では神様のような存在なのではないかと思いつている。

そして今日も、その啓示に従って……俺は明朝から関係者以外立ち入り禁止の危険極まりない登山道に進入して、テクテクと目的地目指して突き進んでいるという訳だ。

この山の危険度は、下手したら死ぬレベルだ。

正直、勘弁してほしい。

下僕じゃあるまいし勝手に一人で行けよ……と……思う筈が無く。

俺はある種の使命感をもって啓示……”約束”を果たそうとして
いるわけだ。

……あの時から、ずっと。

「……………」

背中ザックからスポーツドリンクを取り出し、少しだけ口に含み、飲み下す。

「……………ツブー。……なあ、もう通り越したんじゃないのか？」

やはり考え事は性に合あわわない、と思おい直なし、気持きちを切きり替かえながら妖精さんに向けて話しかけた。ちなみに妖精さんは常時俺の心

を読んでいるため、直接話しかける必要は全く無い。完全に気分の問題だ。

「こつから先の道、今までより一段と険しくなってるしさ……ッ
!……!」

刺々しい熱が伝わってきた。

と、思ったら、一瞬で熱が冷めた。

「?………って……おい?どうした?!」

胸に手を当て、問いかけるも……全く反応が無い。

……頬を、汗が伝う。

先程までの熱は、正確に翻訳するなら、とても口に出せないような罵詈雑言だった。それ程に激しかった熱が唐突に消えたことで、俺の感情にも『不安』という形で表れ始めている。焦り、もう一度問いかけようとしたところで。

全身に波打つような熱が伝わってきた。

痛みは、無い。

この熱は……『歓喜』を示している。

しかも、これは……俺自身の心情すら塗り替える程の、深く、強い感情だ。

「……なあ、どうかしたのか?……何があつ……た………」

そこで、ようやく気が付いた。
先程から、耳を叩くように聞こえる小さな音が聞こえてくることに。

「この音はっ……………水が落ちる…よつな……………滝の音かっ！
！」

ここから遠くない場所に、滝がある。

水が、ある。

そんな言葉が頭をよぎった瞬間、俺は音の聞こえた方面に向けて駆け出していた。

「……………滝！……………どっちだ！？……………向こうかッ！……………！」

さっきまでのテンションは消し飛び、今や最高潮になっていた。

「つよっしゃああああ！！近いッ！！近いぞ！！！！！！」

白い粉でもやってるように見えるかもしれないが、至って正常だ。正常に、喜んでいるだけなので、暖かい眼で見ると嬉しい。

「滝ッ！！！！」

駆ける足は、羽のように軽い。

「……………滝イッ！！！！」

背負っているザックにいたっては、何も無いかのような感覚だ。

「……………滝ッ……………滝い…?!」

そして俺は、駆ける足を、止めた。

古書店と猛獣

突然だが、自己紹介をする。

俺の名前は一条斎（いちじょう・いつき）。

性別は男。

年齢は三十歳に近いが、度々二十歳前後に間違われる事がある。それが最近の俺の自慢だ。

自慢できるような部分はその点のみだ。

どうだ、すごいだろう。

遠慮しなくとも存分に褒めても良……………そうか。

……………今日は休日を利用して、山に来ている。

此処に訪れることを決めたのは…何を隠そう、俺の体内に住んでる”妖精さん”だ。

準備の段階で、此処はあまりに危険がすぎるのではないか…………と反対したのだが、残念ながら俺に拒否権など無かった　どころか、聞いた上で俺の発言を無視した。

……………そうだ。今思えば毎回このような目に遭っている気がする。場所を決定するのは体の中に住む”妖精さん”。

そして実行するのは当然、その体を操作している…俺になる。

全く、何度死に掛ければ…………と、今更愚痴を零しても仕方が無いな。

この場所を選んだのはいつも通りの”妖精さん”だが、今回に限

り、参考にしたものがあつた。

早い話、一冊の雑誌を参考にして計画されたのだ。

その雑誌は古臭く、薄汚れていた。

題名は確か……………

『マニアが絶賛！おいしい名水ガイド』

……………といった名前だつた。

その雑誌名だけでも、かなり怪しい上に胡散臭いものだつたが、販売されていた場所は、そんな怪しさの度を越す酷さだつた。

外から見た印象は……………都心の真ん中にもあるにもかかわらず、本当にやっていけるのか不安になるほどのひなびた小さな古本屋……………という感じだつた。

しかし、いざ中に入ってみれば、それはもう

入り口の戸を掴み、ガラガラと開く。

そして一歩中に進み、軽く息を吸って

「……………ゲホッ！！！」

むせた。

「ゲホゲホッ！！ッ！！？ッッ？！！！」

俺は大急ぎで外に出て、むさぼるように新鮮な空気を肺に取り込

んだ。

「ッ　　ハアッ……ハア……な、なんなんだ?!なんで、こんなに臭いんだ!？」

そう、臭かった。

店内は呼吸をする事に耐えられない程の悪臭が蔓延していた。

古本屋ならば本独特の香りというものに包まれていると思い、完全に油断していたところに、これだ。嗚咽感を通り越して、喉が痛い。嗅覚細胞も死滅するんじゃないか、と不安になる程の激臭。オブラートに包んで例えるなら……腐りきった生魚に、スパイスとしてヘドロを加えたような匂いだ。

「よし、帰るか………って訳にはいかないよな。分かってるよ。」

今日の妖精さんはやけに自己主張が激しい。

仕方なく俺は、ポケットからハンカチを取り出して口にあてる。

そして腰を低くして、ゆっくりと店内に入った。

何やら背後から通行人であろう人々の視線を感じるが……気にしてはいけない。

気にしては、いけないのだ。

鼻を通る気道を完全に塞ぎながら、店内の様子を眺める。

見たところ……内装はいたって普通のこじんまりとした古本屋だった。

並べられている物も普通の本で……普通の……普通の……の？

違和感を覚え、本の一冊を手にとって、題名を確認する。

「……………」近場でフィッシング、初心者入門編……………こつちは『今晚の魚料理』…『上手な魚のさばき方』……………『プロが教える水泳教本』……………『寿司次郎』…『私の釣り戦争』……………へえ『今日から学ぶ小型船舶操縦士免許』なんてものまで…」

漫画、小説、絵本、教本、雑誌……………

店で売られている本の全てが、そんなカテゴリで統一されていた。

まるで、店主自らが読むために店に並べているような偏り具合だ。もし本当にその通りだとしたら……………なんというか……………ここの店主は……………

「馬鹿だけど……………最高だなッ!」

そう、叫んだ。

19

更に突然だが……………俺には一つの趣味がある。

一つの、と言うよりも、唯一のと言った方が正しいかもしれない。少なくとも…俺には他に趣味なんて呼べるものなんてないからな。どうだ、すごいだろう。

と、言いたいが、残念ながらこちらは別に褒められるようなものなんかじゃない。

むしろ、屑だ、最低だ、と貶されるべき唯の遊びに過ぎない。少なくとも俺にとってはそんなもんだ。

……だからといって、俺を罵らないでくれよ。
俺の心は繊細なんだ。

それこそガラス………グラスファイバー程度の強度なんだからな。

…それはともかく…俺の趣味を教えよう。

どうでもいいし、とか思おうが、無理矢理にでも教えよう。

俺の趣味、それは『水』巡りだ。

つまり、名水はもちろん、温泉、河川、湖、海、滝などの『水』
に関係するあらゆる有名所を好んで巡っている、ということだ。
もちろん休日か、祝日に限って、だけどな。

…くだらねーとか何とか思ってくれたらどうか。
それで良い。それが正しいと思う。

他に誰でもなく、俺自身が、そう思ってるからな。

休みになれば朝から晩まで『水』を探しに出かける。
全国各地でも、何を使っても、それこそ馬鹿みたいに巡る。
飢えたゾンビか………って程に、貪欲に、練り歩く。

始めは唯の手伝いのようなものだったのにな。

いつの間にか…それ自体が…俺の趣味になってしまった。

まあ、そんな経過はどうでも良いものだ。

ただ一つ、分かってほしいのは、それぐらい『水』が好きだ、と
いうことだ。

…俺にとって無気力な精神に活が入る活力剤のようなもの、とも思ってくれても良い。

それだけだ。

既に、異臭なんてものは感じなくなっていた。
何千冊という本を前にして、俺は感嘆の声を上げていた。

「おいっ！なんてこったッ！どれもこれも最高じゃないか！！！」
本棚に飛びつくようにして、その一冊を手取る。

題名は 『知っておきたい地下水脈』

無意識に舌舐めずりをしながら、更にその横の本をとる。

題名は 『清らかサイエンス・水質環境学』

「ハア…ハア…本当に凄いな、これは。 ……こんな馬鹿みたいな書店があるなんて…いやッ！こんなデキる店主が居るなんてッ思いもしなかったッ！！」

選り取り見取りで全部買って良いくらいだ。

もちろん、そんな金なんて無いけど…ともかく選び辛い。

「…ど、どうしよう…とりあえず…ま、まず店主と握手をさせてもらってだなッ！…それから、ゆっくりと吟味し…てっ…」

「!?!?」

胸に、電流のような痛みが走った。

……… 解説… 『馬鹿』という一喝。

「わ……… かったッ! …… 選ぶ! 早く選べばいいんだろ?!」

相変わらず、今日の妖精さんの様子は変だ。

何か、苛立つてる感じがする。

… やっぱり、妖精さんでもこの場所は苦手なのだろうか。ヘドロ臭いもんな。

「だけどなあ……… 選ぶにしても、種類が豊富すぎて迷うんだよ………」

周りを見渡す。

今更ながら、俺以外の客は居ない。

もちろんこんな寂れた店に、雇われた店員なんて人はいない。

というか、カウンターに店主らしき人影も見えない。

「……… この店……… こんな街の中心みたいな場所なのに、防犯の意識は無いのか?」

俺以外人は居らず、見渡す限り古本まるけだ。

こうなったら直接店主に聞いて、お勧めを教えてくださいらう方が良いのだろう。

そう思って俺は、カウンターの前に立ち、呼び鈴を探すが無い。

仕方なく、悪臭の元となっているであろう奥の部屋を覗き込む。

そのまま声を上げ、店主を呼ぶが 反応が無い。
一体どうすりゃいいんだ……… と思いかけたその時、カウンターの傍の壁に、店主の伝言らしき紙切れが張りつけてあるのを見つけた。

「えーと、なにになに？……私はしばらく……山に……籠ります……」

【私はしばらく山に籠ります。何か御用があたりでしたら、こちらの携帯の番号にご連絡ください。店主より。 追記：立ち読みはご遠慮ください。本の代金はレジの中に入れておいてください。】

「……さすがに……嘘だろ……？」

信じられなくなった俺は……レジへと手を伸ばし……。

……開いた。

……中身はカラッポだった。

「……わけが分からない……」

溜め息をつきかけ、カウンターの端に視線を送ると……そこにも店主の有難いお言葉があった。

【>店長のおススメ<ご自由にお読みください。】

そして置かれている本は……

『マニアが絶賛！おいしい名水ガイド』

薄汚れた一冊の雑誌だった。

「…分かった……この店主。とんでもなく適当な奴だ。」

その本を手に取り、ペラペラとめくりながら、思わず呟いてしまった。なぜなら、書かれている内容は至極真面目なものだったが……中身は手書きで……店主の手作りの本だったからだ。字が、汚い。添えられているイラストも色々と酷い。

「……でも、本当に詳しく調べられてるな。……これは、ガイドブックというよりも論文に近いかも……一体どこの研究者か学者……って、『マニア』か、なるほど」

この本なら、妖精さんの目にも適う場所が見つかる事だろう。……妖精さんからの反応は無いが……これで決まりだな。本を閉じて、後ろポケットから財布を取り出す。

「それじゃ買うか。値段は……」

そして背表紙を見て

【税込み 10,480円】

財布をポケットへと戻した。

「……携帯のカメラ……は犯罪だから、場所だけ覚えてから帰ろうか？」

やんわりと暖かくなるような熱を感じる。

「……………おおお、こってる……………なあ……………」

逃避の時間は終わった。

改めて現状を確認しようと、ちびりそうな勢いで周囲に視線を走らせる。

音は聞こえるが、近くに滝は見当たらない。

前後に続く道は狭い獣道。

その道を塞ぐように、前方に熊一頭。

目つきがとても悪い。

でかい。

強そう。

……………死ぬ。

「……………いや……………どう……………どう、すれば……………」

死んだ……………ふり？

そんなことしたら確実に食われる。

熊鈴……………なんて物は持ってない。

そもそも実物と出会ってしまった後で、役に立つ筈がない。

どうすれば良い？

あまりの状況に頭がうまく回らない。

体も、動かない。

『グウルルルルッ』

熊は唸り声を上げて、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

その距離、おおよそ10m

「……………げないと……………にげろ……………」

原始的な恐怖に、更に体が硬直する。

5m

「……………にげろッ……………にげろッ!……………」

俺は、声を絞り出して……………声……………そうだ、俺は……………

3m

「逃げるよッ!!!」

…逃げるしかない!!!!

1m

熊が襲い掛かってくるのと、俺が横へと跳んだのは、ほぼ同時の事だった。

空気を切り裂く勢いで振るわれた爪は、頬をかすり、ザックの片方の紐を断ち切った。

間一髪だった。

……泣きたくなった。
それは『止まれ』『戦え』という指示だった。

「……なに……なに考えてるんだ！？あんな熊にツ勝てるわけがない
だろ！！死ぬぞ！！」

再び襲う胸の痛み。

……先程と全く同じものだった。

「……ツ勝手な事を！！！！」

こんな時に冗談など、神経を疑う。

俺は、完全に無視を決め込み、駆ける足を更に速めた。
ぶつかり掛けて、手で押さえた樹の幹が冷たい。
斜面から滑り落ち、岩に打ち付けた腰が痛い。

それでも、走り続けた。

走って。

走って。

転んで。

走って。

それだけ走っても、少し背後へと耳を傾ければ……唸り声や足

音が聞こえる。

「……まだ来てるのかッ！！……なら、もっと遠くに……ッ
?!」

そして、川に出た。

川沿いの道無き道を、全速力で下り降りる。

「……ハッ！……ハッ！！……ハアッ！！」

だけど……おかしな事に、思うように速度が出せていない。

ザックも無く、服装も軽装なので身は軽い筈だ。

現に跳ねるような勢いで道をくだる事ができていた。

そして、その代わりとでも言うように、踏み込むごとに足の裏から脛すね、腿ももにかけて、耐え難い激痛、負担が襲い掛かってくる。

これは……靴がスニーカーが不味かったのか……？

「……ハアッ………こんなッ…事ならッ！！………クッ！！」

駆ける足が先程よりも頻ひんぱん繁に、もつれるようになった。

それでも、後から追いかけてきているであろう獣から、一歩でも

これは、諦めからの笑い……ではなかった。

まるで誰かに意図的に作られたかのような間抜けな状況が、可笑しかった。

そして。

こんな状況でも、滝の水音に感動している自分の馬鹿さ加減が、可笑しかった。

「……はー……それじゃ、これからどうしようか。」

笑いが収まり、落ち着きも取り戻す。

崖の端に立って、下を覗き見る。

とてもじゃないけど、落ちれば死ぬ高さだった。

落ち口から直角に水が流れ落ちる直瀑の滝を見ても、飛び込んで助かる見込みは無い。

「なあ妖精さん。ここが、アンタの来たかった所か？」

問いかけながらも、崖沿いの右方向を見る……。

以前に地滑りじすべでも起きたのだろうか、木々や岩が通行を困難にしていた。

……そして胸にかかる強弱のつけられた痛みは……『否定』。

「そうか、違うのか……」

逆に左の川を見ると…

川の水の色は薄く、浅い川だということが分かった。流れも緩やかで、穏やかだと言う事も分かる。

「なら…まだ、あんな熊にやられる訳にはいかないな。」

やっぱり、逃げるしかない。

そう思った俺は、すぐに川を渡り始めた。

「……早く……なるべく早く渡るんだッ……」

水を掻き分け、それでも慎重に対岸を目指す。

水量は腰から下で、膝に近い位置にある。

だけど川幅は思ったよりも広く、対岸は遙か遠くに感じる。

………不味い。

早く渡らないと、すぐに追いつかれて

『オオオオオオオッ!!』

近くから聞こえた猛獣の声に、動揺が生まれる。

「ッ　　ッ!!!!」

次の一步を踏み込んだ筈の片足が、川底を捉えられなかった。同時に、大きく体のバランスが崩れる。

「なッ?!!!」

流れに足を取られる。

「ッ！！しまったッ

」

水中に体が落ち、くぐもった水音が聞こえた。続けて耳にかかる流水の音が、聞こえた。

そんな事を思った時には、俺の体は既に流され終わっていた。

そして訪れる浮遊感。

「一拍遅れて”滝から落ちた”という現実を理解した。

落ちる過程で両手を広げ足掻くけども 何も掴めない。

そして成す術も無く、滝壺に落ちた俺は、全身を打ち付けて

気がつくくと、川辺に立っていた。

「ッ！！！！？」

つい先程まで見ていた光景が、一瞬で切り替わったように変化した。

「どう……なってる？」

目の前に広がる光景は……数十秒前に見たものと、変わらないように見える。

わけが分からなくなり、今起きた事を思い出す。

「俺は……川を渡って……溺れて滝から落ちて……確実に、死んだ。」

「ごちゃごちゃになりそうな思考の中、自身の状態を確認する。

怪我は……無い。

意識も……明瞭だ。

そこで更に驚愕した。

服が……全く濡れていない。

「……幻覚……？……い……いや、さっきのは紛れも無い現実だった。……溺れた感覚も本物だったッ！……落ちた感覚も……頭を打って、死んだ、感覚もッ！」

化^ばかされたような感覚に、現実感を失いかける。

「なのにッ！一体どうなってるッ！」

そこで、全身に波打つような熱が伝わってきた。

「……ッ！……すまん、妖精さん。ありがとう。」

頭を軽く振って深呼吸を繰り返して無理矢理、落ち着きを取り戻す。

「……なら今、この場所は……」

状況を把握しようと、周りに視線を向けた。

右を見ると、場所は滝の上である事がわかった。

……しかも先ほど川を渡ろうとしていた位置と、全く同じ場所であることも。

「…………って……ことはッ……」

左を見ると……そこには、思った通り……熊がいた。

「またッ……かよッ……!!」

一気に思考が覚醒する。

そして再度、川を渡ろうと走りかけて……止まった。

「………なっ………んだ？………お前は………」

そして俺は震える手で……指を差した。

前方の……川の上の……青い幼女に向けて。

静止する世界

「こんにちわー。あなたばかじゃないですか？」

挨拶と同時に罵^{ののし}られた。しかも幼女に。

そんなことを言われる覚えもないし、そんな趣味も無い。

俺は幼女を指で差しながらも、反射的に怒りが湧き上がった

が、そこでようやく気が付いた。

……目の前で起きている、異常な状況に。

「ッ……………！！？」

怒りが一瞬で消え去る。

頭の芯が凍えるように熱を失い、反対に体温が血液を沸騰させたように急上昇する。

そして俺は、気が付くと叫ぶように声を上げていた。

「……………幼女がッ……………立ってるッ!？」

で、叫んでから気が付いた。

あの幼女が言うように、今の俺の発言は馬鹿丸出しのものだった、
と。

…だけど、そんなものはどうだっていい。

どうでもいいほどに、これは、異常すぎた。

幼女は、立っている。

何度も頭を振り、確認する……しかし、それは変わらない。
変わらず、それが当たり前であるかのように、あいつは平然と立
っていた。

川の上に。

………水の上に。

「あー。聞こえてーますかあー？」

幼女がへらへらと笑いながら、こちらへ歩み寄ってくる。
危なげない足取りで、ごく普通の道を歩くかのように。

戸惑いと困惑が思考を占領し、俺はその様子をただ見ていること
しか……

「ッ！ー！そうだ、今はッ！ー！」

緊急事態だ。

幻覚幼女風情に構っている暇なんて無かった筈だ。

あの猛獣は……熊は……先程は50mほど離れた場所にいた。

なら今は……

「ッッ！ー！！？」

目の前にいた。

「……………な……………あ…ッ……………ッ!」

叫び声は、出ない。

出せるような時間も、無い。

「……………ッ……………」

怒涛の勢い距離を詰めた熊は、既に腕を大きく振りかぶり、俺に襲い掛かる体勢に入っていた。

俺は大急ぎで再度川へ振り返り

振り返って

振り、返ってッ!

(……………ッ……………どう、なってる?!)

体が動かない。

一歩も踏み出せないどころか、首も、腰も、腕も……………指先すらも動かせない。

さっきのように恐怖で体が…とは違う。

身体と精神が無理矢理分断されたかのように、全く体が言う事を聞かない。

(……………不味いッ…!!)

「……………」

爪が、容易に皮膚や肉を切り裂き、致命傷を与えるであろう爪が

迫る。

変な脳内物質でもでているのか、思考だけが狂ったように加速するが……

それでも、体は動かせない。

(ならッ……それなら……)

「……………」

妖精さんの反応は……無い。

(…クッッ!!…!)

”爪”までの距離、50cm

……どうでも良い情報だけが、頭に浮かび上がる。

”ツメ”までの距離、30cm

体が、動かないまま……

視覚に映る風景から色が消える。

聴覚に響いていた水の音が、消える。

(……………どっしょつよつも……無いのか?)

「……………」

”っ……”までの距離、10cm

引き伸ばされたような時間の中。

”……”までの距離、5cm

……俺は、、、

「……」

驚愕し表情を歪ませる事もなく。

悲しみに視界を歪ませる事も、なく。

”……”までの距離、2cm

ただ眼を見開き、その光景を眺めている事しか、出来ずに

。

「……」

、、、死ぬ。

”死”までの距離、1cm

それなら……俺は。

「……………ッて、おい?!……………川も滝も止まってるのか?!」
先程から耳を打つような音が聞こえない事に気が付き、慌てて覗いた川や滝は、熊と同様に動きを止めていた。飛散する水飛沫にいたっては、空中で静止している。

これはこれで　と、心が躍りかけるのを何とか押し込み、そのまま川の水を踏みつける。

……………氷のように……………いや、それ以上に硬くなっていた。

「…いつたい、どうなってるんだ。」

見渡せば草や木といった物も風を受けた状態で静止しており、雲も、風も、遙か遠くの空を飛ぶ鳶も、止まってしまっている。

無音で、無変化する空間。

現実感が欠片も感じられない現状に、一旦深呼吸をして……………

「……………呼吸は、出来るんだな。」

奇妙な安心感のようなものが得られた。

「もしかして、時間の流れとかが……………止まっていたり……………」

腕時計に目を落とせば

秒針は……………動いていた。

「……やっぱり、お馬鹿さんですねえ。」

「ッ！！！」

背後から突然声が聞こえた。

「止まったのは、あなたの周りのものだけですよ？時間なんて余計なもの、私が止めるわけ無いじゃないですか。」

振り返るとそこには 何故か得意気に鼻を鳴らし、指を振る先程の青い幼女がいた。

「それじゃーまーとりあえず！！安全も確保されたことですし……まずは、あなたのカスツカスツな脳みそに、ありがたーい常識を詰めてさしあげましょうか？」

嘲るような笑みを浮かべているが、俺は苛立ち……よりも不気味さを覚えていた。

「いいですかぁー？例え足が川底についても、不用意に川を渡ろうとしてはいけません！！今からお手本をお見せしますので、この通りに川は渡ってくださいよ！！目ん玉をくり抜いて見ていてください！！！」

そして……こうです、こう……と、見せる幼女の”お手本”は……常軌を逸していた。

幼女の足元に……地面は無かった。

そして、水も、無かった。

「こんなことはお子様でも出来る事です。しっかりと、覚えておく
と幸いですよ。」

幼女は……………ふわふわと宙に浮いていた。

「　　と……………それで、次はですね　　」

何事も無かったように、地面に着地する幼女。

……………俺は確信した。

こいつは幽霊か何かだ、と。

それも、悪霊の類の。

青い神の御告げ

時刻は正午。

「幼女あくじょによる”ありがたい常識”の話が始まって二時間が経過した。

その間、俺はなぜか川の上で正座をさせられながら、いつ幼女が本性を現して襲い掛かって来るのかと警戒しつつ、出来るかどうかも分からない逃走の準備をしていた。

「そこで彼女が言っちゃったわけですよ!!!」
「そ、それなら、これからは私が面倒見てあげようか?」
「って!!!」
「つまりですね、告白しちゃったんですよ!!!」
「私の目の前で!!!」
「う、ひゃー!!!」

が、話は予想以上に長く、そして話を進めることに幼女のテンションがあがってきたため、対応に悩んでいる。

「結果は見事惨敗でした!!!」
「当然ですよ〜あんな目ギラギラさせて迫られたら」
「美味そうな餌だ、グへへッ」
「って意味にしか取れませんから!!!」
「……で、そこまでは良かったんですよ!!!」
「いつも通りの事でしたから!!!」

ジェスチャーを加えて力説する幼女。

「問題は、その方と別れて30分くらい経った頃ですよ〜彼女、泣いちゃいましてね〜!!!」
「それも、顔をぐしゃぐしゃに歪ませて、大泣きでしたよ!!!」

今話しているのは……恐らく幼女の知り合いの失恋話だろう。

……やけに嬉しそうに話しているので、違っている可能性も高い。

「そこで私の我慢が限界を超えちゃいまして！！大爆笑してしまいました！！そしたら彼女、今度は顔を真っ赤にして私に怒鳴ってきたんですよ！！『貴女ツいつか絶対に殺すわツ！』って！！どうですか？！酷いと思いませんか？！！私はただ笑っただけなんですよ！！？？」

結局話は半分程度しか理解できなかったが……なんとなく分かった。

「お前、最低だな。」

同時に胸がやんわりと暖かくなるような熱を帯びた。

………若干、弱々しい熱だったが、これは妖精さんによる『同意』の意味だった。

妖精さんが復活したことに俺は小さな安堵の溜め息をついた。

「あれ？…なにか、今……？……ツ…ってえ！どういうことですか馬鹿な人！！」

幼女は激怒し、人差し指を突き付けてきた。

「何で私の話っ分かってくれないんですかっ？！！……さては貴方ツ人間の屑ですねツ！？」

続けて”ピキーン”と青いアホ毛を立てる幼女。

しかも何か電波でも受信しているのだろうか、細かく振動してい

る。

……近頃の幽霊は、随分と多機能のようだ。

「もう馬鹿でも屑でも何でもいいからさ……結局、お前は何だ？お前がコレをやって……助けてくれたのだったのか？そろそろ真面目な話をしてくれッ」

コレとは、現在も静止している周囲の状況の事だ。

「ついでに言うと、俺をどうするつもりだ」と、聞きたかったのだが……こちらは単純に、聞くのが怖かったのでとりあえず、後で。

「えー？もう終わりですか？……しょうがないですねえ。」

まだ話し足りなかったのか、残念そうに口を尖らす少女。

疲れた視線を向けると、流石に観念したのか背筋を伸ばし……

敬礼した。

「ツらじゃー！！」

意味が分からない。

「それじゃーここからの話は、移動しながら順にしていきましょうか。ついて来てください。」

そう言うと少女は、ピョンと軽く真上にジャンプして、川に……
…着水した。

「おッいッ！ー！？」

慌てて足元を確認

大丈夫だ。落ちない。固まったままだ。

「なにやってるんですかつ早く来てくださいつ！屑虫さんっ！」

ザバザバと水を掻きながら手を振っている青い幼女。

「……あ、ああ」

ついで行っても良いのか一瞬迷ったが……思い直し、後に続いた。

「……………」

その途中、もう一度だけ振りかえる。

視線の先は……川岸にたたずむ熊。

熊は……やっぱり先程と変わらず、固まったままだった。

変わらず、一歩も動かないまま……殺気だけは正確に、此方に向けられていた。

本当に、どうなってるんだろうか……。

”青い幼女”の後に続き、川を上り始める。

俺は川の上を歩き、幼女は俺の足元2m前方辺りの水中をクロールで進んでいる。

なぜ静止させた川の上を歩かず、わざわざ泳いでいるのかは分からない。

意図は読めないが……予想ならできる。

多分、単に泳ぎたかったからだろう。

……泳ぎが好きなのだろう。

だが、それにしては……

「…………ツ…………」

襲い掛かる多量の水飛沫を避けながら、俺は呆れていた。

「（…………下手過ぎる。）」

これは……バタ足のつもりなのか？

先程から行っている幼女の泳ぎ方は、靴を水面に叩きつけては水柱を上げ、少し前へ進み……再び水面に叩きつけては、ほんの少し前へ進み……という殆ど攻撃のようなものとなっている。

……もはや、わざとだと思えない。

「……………」

それにしても、話は一体いつになったら始まるのか。

流石に今さっき言った事を忘れていない、という事は無いだろう。

ボケた老人じゃあるまいし……………

「……………」

頭上から降り掛かる水飛沫を手で払いながら、俺は幼女を観察することにする。

……………変な意味ではなく、普通の、観察だ。

”青い幼女”

表現の通り、全身真っ青の幼女。

と言っても、真っ青なのは髪や目、眉や服だけで、皮膚は普通の肌色。

髪はショートで水玉柄のワンピースを着用。

素足で履いている靴は、サンダル……………といったような軽いものではない。

やけにゴツイ長靴、ブーツ　とも、違う。

……………軍靴だ。

……………軍靴を履いて、泳いでいる。

真面目に、理解に苦しむ。

背の高さは俺の腰程度……………1m弱といったところか。

丁寧口調で姿勢も良かったが、極めて、口が悪い。

見た目や奇抜な服装以外、どこにでも居る普通の……………生意気なガキだ。

当然、ボケ老人には見えない。

……………もちろんただの幼女とも、幽霊などにも見えない。

一体、何者なんだ？

視界に入っていた筈の幼女の姿が、消えた。

「……………」

気が付くと、幼女は俺の真横に立っており。

そして、軽く体を捻るような動作に入っていて

「そんなに嘗め回す様にジロジロ見ないでください。反吐が、出ますよッ」

膝裏を蹴り飛ばした。

「……………ッ？…ッ！！痛ッ！？いきなり何してんだお前？！！」

強烈な衝撃に、体が持っていかれそうになるのを……………なんとか堪える。

「天誅ですっ！手加減してやりましたから、感謝してください！！」

幼女の言い分に同調するように、痛みが伴う断続的な熱が胸に広がった。

……………なんで、俺を責める？妖精さん……………味方じゃなかったのか？

……………

「……………うむ…む？……………まー……………とりあえず話、進めていきましようか。」

幼女は不思議そうに首を傾けていたが、しばらくして顔を顰めながらも頷いた。

「それでは一条さん。聞きたいことがあれば何でも聞いてください。なんでも答えますよー」

指でチヨイチヨイと曲げるような動作をさせる幼女。

これは……………」掛かって来い”…という意味だろうか？

そして幼女は再び背を向け、歩き出す。

俺も片足を引きずりながら、後に続いた。

「……………そうだな、まずは……………どうして、俺の名前を知ってるんだ？」

「今さっき、知りました！」

…なんだ、それは。

「……………どじやって？」

「“力”っていう奴です。……………これ以上は”ぶらいばしー”に関わりますので、回答を拒否しますー！」

「……………???.?」

なんとも反応に困るが……気を取り直そう。

「それなら、次だ。…お前は何者だ？」

「何者だとおもいます？空っぽのノーミソで考えやがってくださいっ！……あ、でももしも正解したら、ご褒美に頭なでなでしてあげますよ？」

駄目、だ、我慢だッ……我慢ッを

「……ッ……っ……そう、だなあ……悪霊か？」

怒りを、落ち、着けて……返答をする。

「不正解。どんな目で私を見てるんですか？」

呆れられた。

……意外と合っていると思ったんだが……

「……河童の妖怪か？」

「ぶつぶーです。でも惜しいですッ！もう一声……！」

近いのかよ。

となると……そうか。

「そうか分かったッ……魔導少女って奴だろ……！」

これで、決まりだ。

魔導少女。

テレビの人気番組の一つで、毎週日曜日の朝に放送されている。子供向けの特撮番組で、内容も至ってシンプル。悪の組織と正義の味方との戦いを描いた物語だ。

正体を隠して日々を過ごす魔導少女。

幸せで平凡な日常。

楽しい仲間とのやり取り。

そして唐突に訪れる、敵の襲来。

逃げ惑う人々。

飛び交う悲鳴、次々とあがる断末魔。

そして彼らの絶望を糧に覚醒する改造人間・魔導少女。

驚き、慄く敵達に襲い掛かり……

ど派手で非道な魔法を操り、戦場を華麗に舞い、数々の敵を葬る。そしてクライマックスに正義の味方との戦闘へ突入する。

激闘 仲間の死 そして決着へ。

人々の拍手喝采を受ける中、颯爽と姿を消す魔導少女。

その影で拘束され、拉致される正義の味方。

そして現れる新たな仲間との日常。

昔からある定番の番組だが、内容はもとより金の掛け方もまた特撮番組の度合いを超えてる。

そのためか一部の大人達はもとより、子供達からの支持が特に厚く、視聴率も非常に高い。

俺も毎週見ていたが、あれはなかなかのものだったと思わず関心

……念のために言っておく。

ファンではない。

「……………はあ？」

呆気にとられる幼女。

やはり、凶星だったようだ。

……………と、なるとこの現状も特撮かなにかだろうか？
ずいぶんと大掛かりな装置だな。

「違い、過ぎますッ！なんでそんな答えになるんですかっ？！！幼稚園児ですか、貴方はッ！」

「なんだ、違うのか。」

そうかそうになると……………

そうになると……………

うーむ……………

……………

「……………ただの小生意気な糞餓鬼か。」

…あ、なんだこれ。スツと頭に思い浮かんだぞ。
これが正解に違いはない。

「蹴り倒しますよっ？！！！」

これも違ったようだ。

時刻は午後2時。

進む川も地形も一層険しくなっていく。

俺は、結局幼女の正体を当てることが出来なかった。

……別に、幼女に頭を撫でて貰いたかったから頑張ってるわけではない。
散々馬鹿にされ、それでも答えられなければ、流石に悔しくもなる。

「お手上げだ。全く分らん。……正解はなんだ？」

俺は両手を挙げてお手上げのポーズをとった。

「ふっふーそうですかそうですか。いいでしょーここまで頑張った
ご褒美に、正解を教えてさしあげましょう。」

幼女は不敵に笑いながら腰を折り

「……………私の正体はですねッ……………なんとッ……………」

手を組み、丸くなって

「神様ですッ！！！」

グ コのポーズを決めた。

「……………あ、そう。それは凄いな。」

やっぱり唯の少女だったようだ。

「ええっ！！？ たったそれだけですかつ？！！」

期待して損した。

「私、神様ですよっ？！ 凄くないですか！！？？」

時間も損したな。

……………まあ、この川の更に上流に何かあるみたいだし、そっちに期待してサッサと上ろうか。

「あのーッ聞いてますかーっ？！ 神様ですよーッ！！！」

しかし、どうなってるんだろうな。この状況。

今俺、川の上を歩いてるぞ？

……………どんな魔法だよ。

「目をそらさないでこっち見てくださいよーッ！！ 一条さーんッ！！」

……………魔法、なんて……………もの、あるわけがないよな。

馬鹿馬鹿しい。

あつてたまるか、そんなもの。
もしそんなのが存在してんなら、全裸でその辺りにあるドブ川で
も泳いでやるさ。

すると？残るのはやっぱり特撮……か。

それも魔導少女みたいな大金が掛かった大規模な舞台装置……。
さっきの熊も、中に誰か人が入っていて……いや、ロボットだっ
たのか……

魔導少女……か……

どう考えても、こんな所にいるわけないよな。
いたとしても、こんなのを採用するなんて……

「ッ?!そんな醒めた目で見ないくださいよっ!ちょっと鼻で笑
ってますし!!何考えてるんですか?!」

全く、仕方が無いな……

「それで、お前は何者なんだ?」

「ッ無かった事にする気ですか?!……いいでしょうッ何度で
も言っただけですよッ!!私は、神様ですよ!!?」

ああ……駄目だこれは。

せつかくさっきの痛い発言を無かった事にしてやれる流れだった
のに……鈍い奴だ。

「そっか、なるほど神様か。」

「???...あれっ?ついに分かってくれたんですねっ!!!...その
そうなんですよっー私は神様なので、貴方を助けてあげたんですよ
!..!」

一応納得はしてみた...が、残念ながら俺は1欠片たりとも信じ
ていない。

こんな米粒みたいな奴が神である筈が無い。

それ以前に神なんて存在しないと、確信している。

.....あ、妖精さんはいるぞ?実際に見たことがあるからな。

「それは.....ありがとう。助かった。.....でも、どうやって俺を助
けてくれたんだ?.....それも”力”ってやつを使ったのか?」

傷は浅く留めて置かなければならない。

この子の将来の為に、なるべく.....。

「ッ!!!.....す、凄いですね!!その通りなんですよ!!!.....
素晴らしいです!!貴方、なかなか見所ありますよッ!!!」

.....可愛そうに.....もう手遅れだったか.....。

「.....そ、そうかそうか、ありがとうなー。.....それじゃあ、俺の
用事も済んだことだし、そろそろ帰ってもいいか?」

どうやったかは知らないが.....こいつは色々な意味で危険な奴の
ようだ。

俺はもう帰りたい。早めに、できるだけ穏便に.....?」

「.....」

「……………?」

……?なんだ?この間は。

「おい、幼女……どうした?」

その言葉に、無言だった幼女が”ピクリ”と反応する。

「誰が幼女ですか。……あつとーですね?それが……申し訳ないのですが……今開放する事はできないんです。」

申し訳なさそうに俯く。が……

「……できない……って?どういうことだ?」

「はい、できない……と言いますか、それしてしまうと貴方が危険なことに……。」

俺の足が止まり、幼女の足も、止まる。

「……意味が、分からないんだが……?」

向かい合い、問い詰めるように……質問する。

睨んではないはずだ……自信は無いが。

「ッ!……ででもッ安心して下さいッ!……代わりに、良いことを教えてあげますので……!」

いやいやいや、どうして、はぐらかすッ?

「私から貴方に、とっておきの”にゅーす”があるんですよ。これは残念な”にゅーす”ですけど……同時に嬉しい”にゅーす”なんです……喜んでください……！」

話の内容が内容なだけに、取り合えず苦笑いを浮かべてはいるが

……

「……そうか、それは……なんだ、ありがとう。」

内心、かなり動揺しまくっている。

「……それで？ ニュースってなんだよ？ ……教えてくれ。」

コクリと頷く、幼女。

……おかしいな、なんか天使に見えてきたぞ。

目の錯覚だろうか。

そんな趣味、無い筈なん

「えとですね。”あなたが死ぬ”というにゅーすです。」

………？

「………は？」

俺の、聞き間違えだったか？

「あ、すみません、ちょっと間違えましたッ！」

間違い、か……だよ、なあ？

「そ、そうかッ！……そうだよな！！それじゃ本当は……？」

「貴方は……これから死にます！！絶対に死にますッ！！！！確実に、死を迎えますッ！！！」

死の宣告を連呼する幼女。

もう天使には見えない、どころか、なんか段々と……

「……は……え？と……いやッ待てッ！！それはどういう事なんだ？！！」

……それでも冷静を保ち、詳細を問う。

「貴方からは死の匂いがプンプンしてるんですよ！！これはもう、貴方いこーる死！って言っても過言ではありませんね！！ゾンビも貴方の死臭にはびっくりしますよ！！私もびっくりですよ！！！」

俺もびっくりだよ。

驚いた衝撃で腹を突き破って幼女が出てくるぞ。

……いやいやいやいや、駄目だ。

落ち着け、冷静に、なれ。

いきなり死を宣告されれば誰でも驚くに決まってるだろうが……

『否定』だ、否定をしている！！流石だ妖精さんッ！！愛してるぞッ！！！！

そうか、だったらッ……………いや、待て。

さっき”嬉しいニュース”って言ったのは事実だぞ……？
どういうことだ妖精さん？

「……………すごい汗ですよ？大丈夫ですかー？」

……………？……………

妖精さんの反応が、無くなったぞ。

……………

やはり、無い。

……………

どうする、どうすればいいんだ？

こいつは安全なのか、危険な奴なのか……………判断ができない。

……………とりあえず。

手っ取り早く、直接、聞いてみる……………か……………？……………

「それはなんだ、つまり……………お前が、俺を……………殺す……………って
事、なのか……………？」

そんな震えながらの質問に、幼女は一瞬、驚きの表情を浮かべ

満面の笑みと

ピースサインを

返してきた。

「……………」

俺は、大きく、息を吸いこみッ

「っ、ついに本性を現したなッ……!!このッ悪霊がああああああ
あ……!!」

叫んだ。

同時にッ除霊の念を込めて……………眼前のガキンチョを見据える
ッ!

「…………ッ?!えっ?!突然なんですかっ?!」

びびる幼女。効果は抜群だったようだ。

「……………焼きッ……………ッ……………殺すッつもりなのかッ?!?」

なん、だ…?今の激痛は……………妖精さん……………じゃ無い。
こんな徐々に増してくる痛みなんて、初めてだ。

……………が、今は痛みに耐える時では無い。

苦しんでいる時でも、無い。

そんな余裕なんてあったら、一刻も早く逃げるか、それとも……………

コイツを。

「?!?!……………落ち着いてください一条さんッ!?!何か、変ですよ
!?!貴方、おかしくなってますよッ!?!」

膝を付き、貪るように空気を吸っている姿に慌てた、かのように、
死霊が駆けてくる。

そして、俺の腕を

「ッ……………近寄るなッ!?!……………何が望みだッ?身体かッ?……………そ
れとも魂かッ?!」

掴もうとした手を大急ぎで払う。

勢いのまま、倒れ込むように、後退する。

「……………別に私はそんなッ……………あああってもッ”魂”っていうのは
ある意味……………当たってますけどッ……………でも、そんな意味じゃなくて
ですね。もっとこう……………なんて言いますか……………”救済”……………そ、う

「！！”救済”のために死んで頂くんですよ！！！！」

喉を、冷や汗が伝う。

「じゃあ……本当にッ……？！！」

寒気が全身を襲い、身が強張る。

……強張らせて……しまった。

「ッ！！今ですッ！！」

目の前に死霊が現れ、俺の腕を、取った。

「大丈夫ですッ！落ち着いてください！！私が今、楽にさせてあげますから！！！！」

「？！！！！」

……いつ動いた？いつ、目の前に現れたんだ？

「……………う……………あ……………」

……見えなかった……訳ではない。

はっきりと見えていた上で……奴は……

消えた。

一瞬で消えて、一瞬で移動して、そして……掴まれた。

これは……………ヤバイ。

こいつは、ヤバイッ。

人間じゃああ、無いッ！

「……………ッ！離れ……………ッッ！！ガ、ハッ！！！」

殺されるッ！！

整わない呼吸の中、暴れ、離れようともがいた筈の腕が、全く動かせていない事に気が付く。

1cmどころか、1mmも動かせないでいる。

……………反応すらもしない。

「混乱しないでッどうか落ち着いてくださいッ！！！」

そこで、気が付いてしまった。

目の前の人物が、先程のものとは一変して、全く、別人のものとなっている事に。

「(……………ッ化け物?!?!… ツ!?!?!?)」

そして、気が付いて、しまった。

俺の腕が……………

掴まれた片腕が……………青白く、変色していく姿を。
真っ赤に染まった血管が浮かび上がり……………

血が、波打つように、蠢き、踊る姿はまるで……

……生気を吸われているの、だろうか？

「ッ

」

「……一条さんッ?!……どうしたのですかッ?!……一条さん?!
!」

目の前が光が消えた。

体を焼いていた熱も消え、痛みも、消えた。

そして意識もまた、消えた。

そして『私』は

意識を取り戻した。

目の前に映る光景に、焦りと、歓喜を感じながら

魂の片隅^{かたすみ}で、意識を、取り戻すことができた。

そして『俺』は

意識を取り戻した。

目の前に映る光景に、怒りと、殺意を滲ませながら

魂の片側^{かたがわ}で、意識を、取り戻してしまった。

契約と終着点

そして、俺は

頷いた。
うなづ

頷いて、しまった。

『ふふ、いい答えね。』

そして少女は微笑んだ。

優しく、嬉しそうな笑顔だった。

『それなら早速 ” 契約 ” を行いましょう？』

少女はゆっくりと此方へと歩みを進める。

燃え尽き、黒色一色となった木材の上を乗り越え、あるいは飛び越えて、近づく。

燃えるような赤い髪、爛々と輝くルビー色の瞳が視界いっぱいになり、止まる。

間近に迫る少女の異質な姿に、動揺は……しなかった。
俺にはもう、そんな気力なんて残ってはいなかった。

『この契約の印は………貴方がしないと意味が無いわ。……後はお願い。』

優しい口調とは裏腹に、少女の瞳は一切の否定を許さぬ業火の視線を放っていた。

「ああ……………」

俺は了承する傍ら、本当にこのまま”契約”をしても良いのかと悪足掻きのように悩み続けていた。

……俺は先程、否定しようとした。

そんな事は出来ない。

そんな事は決して許されないと。

そんな事をする権利も資格も……俺には無い、と。

だけど、俺は……納得が出来なかった。

……いや、違う。

俺はただ、許せなかった。許せなかっただけだ。

あんなものを見せられて、平気でいられるほど、俺は……

「……………そう、だったな……………」

そう、だからこそ俺は……否定する事を、止めた。

……………頷き、了承した。

一度決めてしまえば、頷く事自体に迷いは無かった。

そうすべきだと、もうそうする以外に方法は無いと、確信してしまっただけだ。

……………確実にそうする事が正しいと……思ってしまったからだ。

……… だったら今更、考える事など無い筈だ。

何も、迷う必要は無い筈だ。

「…これで、いいのか？」

そして俺は契約を行った。
急ぐように、早々と。

『……… うん、これで……… 契約成立。』

そして少女は離れた。
惜しむように、ゆっくりと。

『これからよろしくね。イツキ。』

少女は微笑み、手を差し出す。
その笑顔は優しく、暖かいものだった。

「ああ。よろしくな。………妖精さん。」

俺は無理矢理の笑顔で握手を返した。

自分で言うのもなんだが、今の笑顔は100点満点に近い出来

『………私の名前は”ヴィレナ”。名乗ってなかった私も悪いけど、勝手に変な名前つけないで。殴るわよ。』

殴ると言いつつも、少女は既に捻じ切れる勢いで頬を掴つかっている。

「 ツ痛痛痛痛ひゃいッ!!悪ひッ悪かったよッ!!!」

半端じゃない握力だ。

しかも何故か抓られてる部分がとても熱い。

今の感覚を例えに表すなら 赤熱したペンチを両手を使って

思いつきり……………

と、とにかく、そんな場合ではない。

失神どころか、下手すれば失禁してしまう痛さと、熱さだ。

『まったく……………』

1分程の拷問の後、頬に掛かっていた万力のような力が消えた。

「 ……痛ツツ……………痛…?……………??…あれ?痛くない。」

途端に痛みも、熱も消えた。

あまりにも突然消えたため、ついに千切れたのかと頬を恐る恐る触ったが…何ともなかった。

俺は不思議に思い、頬に向けていた意識を少女の方へと戻す……………と……………。

少女は無表情のまま、親指と人差し指を開いたり、閉じたり…開いたり…閉じたり……………

「ッ
」

知らず内に体が細かく震え始めていた。

慌てて止めようと思ったが……………止まらなかった。

どうやら今のやり取りは、体のなかに完全にトラウマという形で残ってしまったようだ。

『ふふふ……それじゃ契約も済ませたことだし、最後に忠告をしておきましょうか。』

半泣きになる俺を前に、上機嫌に頷いていた少女はしかし、その言葉と共に、纏う雰囲気を一変させた。

『イツキ。ここからは、気を引き締めて掛かりなさい。仮にもイツキが今から行う事は”……”。……少なくとも油断なんて許されない代物よ。』

強く引き伸ばされた弦のような空気が、辺りに漂い始める。

『いくら私が手を貸すといっても、下手をすれば貴方の体が危険に晒される。……貴方が死ぬ可能性だって十分にある。……その覚悟は出来てる？……準備は出来ているのかしら？』

そして、少女は笑った。

その笑顔は無邪気で……

冷たいものだった。

揺らめく冷炎のような、瞳。

そこから発せられる、見定め、試すかのような、視線。

それを見た俺は、思わず後退ってしまう。

一步、二歩。

そして三歩目を踏みかけたところで……足が、止まる。

「……………」

そうだ……いや、そうだった。

これから俺が行うものは、結局のところ”…………”。

どんな理由があろうとも、どれだけ言い訳を並べようとも、決して許されない行為…………

…………そして、貶され、嫌悪され、軽蔑されるべき行いだ。

その上、これは…………

『……あら。もしかして怖気づいちゃったの？……………それとも”

…………”するのが嬉し過ぎて、震えてるのかしら？』

他の誰かの為に行くものなどではない。

俺の為に、行うことだ。

…それだけは、忘れてはならない。

…そこだけは、誤魔化してはならない。

「……………ふざけたことを抜かすな。」

『ッ？…そ、そう？…なら、良いけど…』

これは、俺自身が納得し、決断し、切望した”…………”だ。

なら……………ならばこそ。

「……………覚悟はできている。」

少なくとも他人の『こいつ』には任せてはならない。
できるならば『俺』が行う方が今後の為にも…。

「……”力”を貸せ”妖精”。……始めるぞ。」

……さてと。

”彼”の中に残っている記憶は、ここまで。

この後の記憶は前に確認した通り、少しも見ることが出来ない…。
消されたのか……奥深くに隠されたのかもしれない。

それとも……私から確認できないよう巧妙に細工を施されたのか
も……。

…ま、最後のは無いわね。

ありえそうで、無いわ。

当てずっぽうに近いけれど、”アイツ”がそんな無駄な事をする
とは思えない。

性根も根性も腐ってそうだけど、少なくとも”彼”の記憶に害を
残すような真似はしない。

私だけに害が及ぶ事なら喜んでやりそうなんだけど、”彼”に少
しでも影響があるなら……。

……なんか逆に信用してるみたいで、腹が立つわね……。

……こっちは『こいつ』呼ばわりされてたのに……あんな”寄生
虫”のような奴に……。

.....

ま、いいわ。

ともかく”あいつ”に見られて困る部分が見つかったんだから、今回は良しとしておきましょう。

さっさとコレを片付けて退散しましょうか。

繊細に 巧妙に ”力”を込めて 折り畳んで 隠して

隠して はい、完成。

…ふっ……ふふふ。

これで、恥をかかないで済むわ。

どんなものよ、この速度、精度、完成度っ。

どうやって調べても見つかりっこない。

所詮”あいつ”の”力”なんて、私の足元にも及ばないもの。これで完璧、よ。

.....

…あ、そうだ。

ついでにさっき見つけた邪魔な記憶にも手を加えておこう。

そうねーこっちは……特に残しておく必要もなさそうだから……
…うーん……。

……隠すよりも……綺麗に消しておいた方がいいわね。
スマートに行きましょう。

それじゃ 大きく”力”を込めて 消し消っ？ |

…あらら。簡単だったわ…。
本当に綺麗に消えてしまったわ…。
…なんだか…。呆気ないわね…。

………

そうね。それならこっちの大きそうな記憶も…

消し消し

…はい消えちゃった。

さすが私。塵一つ残ってないわ。

………

消し消し 消しッ

………秘技、2記憶同時消し………

………

消し消し消し

あ、3つもいけたわ。奥が深いわね………

………

消し消し

ふふ………

…

あ。

…

…？

…ツ？！

もも、もももしかしてツ私ツ！今ツ！不味い事してなかったツ？！

なにか、取り返しのつかないことをした気がッ

？！！

………………きつと、気のせいよね。

そうね、気のせいに決まってる。

私がそんな馬鹿な事する筈がないもの。

今までののは全部、夢よ。

夢。

夢だった。

だってほら……………周りを見渡せば……………

……………残念な事に……………

何も残って無いわー！

.....

どうしよ、まずい.....まずいなあ.....

このままじゃ”あいつ”になんて馬鹿にされるか.....。

それ以上に”アイツ”にバレたら平気で私の存在を消しに掛かってくるかもツ.....！！

ソレ、以上にツ.....”彼”自身にどんな影響が出てくるかツ.....想像も、つかない.....！！！！

もしかしたら何も変わらないかもしれない.....。

で、でも性格が一変してしまうかもしれない.....。

.....それどころか、感情が消えてしまつて、廃人のようになってしまつかもしれない.....。

そうなればきつと.....

.....寝たきりの生活になつて、誰かの介護が必要になるわ。

.....死ぬまで誰かが面倒を見ることになつて.....

.....あ、それもい　だめだわツ！！！！

このままじゃいけないツ！何か良い方法を見つけないとツ！！

早くっ！早くっ！！

.....

あ、そつだ。

記憶が無いなら適当に詰め込めばいいじゃない。

何て　　名案なんだろうっ！

誰も思いつきもしない発想だわ！

間違いなく、天才の、発想だわ！！

もしかしたらツ.....将来は発明家になれるかもしれないわね.....

.....

……そうと決まれば早速……

何を詰めよう？

……ま、まあ私の記憶でいいか。

……となると……私にはいらなくて彼にとって価値がありそうなのは……

あの部分で決まりね。うん、決まり。

私にとってはただの黒歴史みたいなものだったから、無くなっても問題無いし。

きつと今の”彼”が見ても、何のことだかさっぱり分からないと思う。

……それでも後々きつと思い出すことになる。
その時に理解して貰えれば良いだけだもの。

そうそう、いまさえ良ければ後はどうでも良いの。
スマートに行きましょう。

記憶を走査 ”力”で切除 詰めて詰めて 偽装し
て はいよーし、完成。

丁寧に”ラッピング”をしておいたから見た目も綺麗だわ。
そのせいで中身の確認ができなくなってしまったけれど、後でき
つと……。。

……偽装がバレた時の為に、謝罪の言葉でも
添えておこうかなつ。

……こっちの内容は……どうしよう。

『ごめんなさい』……………ただだと、味気ないわね。

……………となる、と……………今まで2年間、ずっと気になっていた事も付け加えて……………。

『ごめんなさい。私の事は妖精さんじゃなく、ヴィレナと呼んでください。』……………と。

うん、完璧な謝罪文よ。

ヒシヒシと想いが伝わってくるわ。

……………

それじゃ後始末も終わったことだし、撤退、しましようか。早く定位置に戻らないと、そろそろ”彼”が起きてしまう。多分その時に……………”アイツ”も目を覚ます……………。

……………危なかった……………本当に”アイツ”にバレなくて良かったわ……………

……………

そういえば……………

此処に来るのも、これで最後になるのね……………。

そう思うとちょっと寂しいかも……………

……………そうだった……………まだ何かしてあげられる事が……………。

……………っ……………駄目、ね……………このまま去った方がいいわ……………立つ鳥後を濁さず、だもの……………。

……………残念だけど……………綺麗な鳥は、華麗に空に飛び立たないといけ……………

ないものなの。

……残念だけどっ……本当に、残念だけどっ……これが現実なのよ
ッ……

……それじゃ、またねっ！”イツキ”……

……

頭の中で……妖精さんが……舞って……消えた。

そんな言葉が頭をよぎった直後。
急速に意識を引き戻されるような感覚と同時に
嘔吐感が込み上げてきた。

「ッ……ゴボツゴボツ……ガハッ……」

咳き込み、肺に溜まった水を吐き出し、ゆっくりと瞼を開ける。

「（……なんだ？肺に水って……）……ゲホッ……（ッ……俺、溺れ
てたのか……？）」

瞬きを繰り返し、焦点が合わさった視界に、はじめて入り込んで

きた光景は……

淡いオレンジ色に染まった広大な空と雲、だった。

どうやら俺は数時間ほど気絶していたうえに、現在は仰向けの状態で倒れているらしい。

「（……………丸々1日寝ていたって事は、流石に、無いよな？…………）」

頭痛を残す頭を無理やり覚醒させ、上半身を持ち上げる。

「……………ここは、どこだ？」

思わず出たありきたりの言葉を呟きながら、ぐるりと周りを見渡す……………

場所は、先程と変わらず森の中であつたことが分かつた。

…ただ少し、さっきと比べて様子がおかしい気がする。

辺りの地面はすべて苔で覆われており、緑色の絨毯のようになっている。

点在する木々は、季節が秋であるにもかかわらず青々と茂っている。

…少しどころじゃない。全く違っている。

空気の質も違っている。

この季節特有の乾いた空気ではない。

真夏のような熱気と湿気が充満している。

……………気絶してる間に、秋から夏にタイムスリップでもしてしまった

たのか…？

「……………って、あれ？そういえば何で気絶してたんだっけ…？」

思い立って記憶を遡ってみたが……駄目だった。

なんの原因かは分からないが、その一部分の記憶だけが綺麗に無くなっていた。

それ以前の記憶は……大丈夫だ。

幼女の姿をした死霊しりょうから死の宣告を受けた事はキチンと覚えてい
る。

だけどその後は　　どうなったのか、思い出せない。

「そうだ。あの死霊は結局　　ッ」

そこで川の音に混じり、何処からか流れてくる不自然な音に気が付いた。

息を呑み、音の聞こえた方向へ振り返る。

立ち上がり、ふらつきながらも極力音を消して、接近する。

1分と経たず川岸に到達。そして、生い茂る草木の間から見えたものは

「……………なに漁ってるんだ？」

背を丸めて俺の荷物を漁っている死りよ……………幼女の姿だった。

幼女はゴミ袋をバリバリと散らす野良猫の如く、嬉々として中身を物色していた。

……しかも、ちょっと涎がでている。

「あつ……よ、ようやく起きられましたかっ!!」

雷に撃たれたように立ち上がり、旧世代のロボットのようなきこちない動作で振り返る、幼女。

あろう事に、その過程で素早く俺の荷物を蹴り飛ばし、草木の中に隠蔽している。

蹴った際に発生した音は、川の音に紛れてうまく消されたが……残念ながら俺はその様子を一部始終見ている。気づかないわけではない。

「ああああのですねっ コレは、ですねッ」

刺さる視線に慌てたのか、取り繕うように必死に手を動かす幼女。さながら千手観音を連想させる姿だ。

「……隠さなくて良いさ。一度は捨てた物だからな。全部やるよ。」

俺は苦笑しながら、川辺の座りやすそうな丸石に腰を下ろした。

今言った通り、あの荷物は熊から逃げる際に捨てたものだ。

元々大したもの入っていなかったから、困る事もない。

……財布は、まあちょっと勿体無い気もしなくもないが、サービスだ。

8万円程度入っていた気がするが……気が、するがッ……気のせいだった。

「も、もちろんそのつもりでしたよ!!私に使ってもらえて良かったですね!!感謝していただいても良いですよ!!!!」

何故か胸を張りながら自慢げだ。

「ああそうだな。ありがとよ。」

意味の不明さに小さく噴出し……ふと、視界の端から入ってくる光に、目を向けた。

幼女から視線を外して……川の水を、見た。

水の流れは……正常だった。

止まっては、いない……。

「……………」

上流には珍しく、川の中には流れを分断してくれるような野暮な岩は、無い。

水が清流となって、緩やかに流れている……。

穏やかで、緩やかで、滑るような……綺麗な流れだ……。

「……………どうですか？一条さん……………落ち着かれましたか？」

視線を前に戻すと、すぐ目の前に……………青い、女性がいた。

「……………??？」

……………女性、だ……………女性だった。

幼女ではない。断じて、幼女などではない。

服装は同じだが……………背丈が違う。

顔の作りも違う。

髪の長さも違う。

何より言葉使いが、違う。

綺麗な、女性だ。

髪や目は青いままだが……幼稚さが消えている。

そう、幼稚くない。幼稚ではないのだッ！

当然の事ながら俺は驚いた　　が、今度は混乱するようなことは無かった。

先程も……正確には気絶する寸前にも、同じ姿の女性を見た記憶があるからだ。

むしろ、動揺したのは、俺よりも妖精さんの方だったに違いない。なぜなら心臓を内側から殴られているような感覚があるからな。

それも何度も、だ。

相当驚いたのだろう……その気持ちは分かる……分かるが……痛いなあ……。

「……大丈夫そうですね。安心しました。」

そうして女性が浮かべた笑みは……見ていて”ほっ”と安心できるような笑顔だった。

……… 化け物扱いをしていたあの時の自分を殴りたい。

今すぐ過去に戻って……… あ、だからって、強く殴らなく

てもいいぞ、妖精さん。

「ここをもう少し登った先に、私のお気に入りの場所があるんですよ。先程の話の続きをその場所で……… と思ったのですが……… 疲れているようでしたら、もうしばらく休んでいけますか？」

いかんいかん。

苦しそくに胸を押さえていたのを、また誤解されてしまったよう
だ。

「あ、いえ。大丈夫ブツ……ッ！……大丈夫、ですよッ……心配には
ツ及びません……ッので……！」

何故だッ?! 何故更に強く殴るんだ?! 妖精さん!!!

「……そうですか?」

大丈夫のようには見えませんよ?と目で問う女性。

「……ッ……グッ……っ……やっぱりッお言葉に甘えさ
せて頂きます……」

情けないが、無理だった。

…耐えられん。

このままじゃまた、吐く。

「わかりました。それでは先に行っていますね。……でも一条さん、
なるべく早く来て下さいね?……もうそろそろ、お勧めの時間帯に
なるんですよ。」

堪えきれない、といった感じで、しかし上品な仕草で笑みを浮か
べ、上流の方へと登っていく青い女性。なんだ、ただの聖女か……
………っつてッ………

そのまま登っていくかと思われた彼女は、道中”ハッ”と何か思
い出したような顔になり……先ほど茂みの中に隠された荷物を素

早く取り出し、持ち去っていった。

その際に少しだけ見えた横顔は……非常に嬉しそうなものだった。

「……………なんだか、なあ……………」

なんだかんだいっても根本的な部分は変わっていないようだ。
安心したような残念なような……………。

上げていた腰を、ストーンと元の丸石の上に落とす。

そして思わず浮かべてしまうのは……………危機が去ったという安堵と
……………これからどうなるのかという不安とが織り交ぜられたような、
微妙な笑みだった。

「（……………ただ、あれだな……………」

川の清流を見ながら、何となく思った。

『あと少しだな』と。

……………あとほんの少しで、約束が果たせる、と。

直感に似たようなものだったが、何となくそう思った。

……………そして、その通りとなった。

しばらくして彼女の後を追いかけて、辿り着いた先は……………滝だった。

「……………」これは、凄いな……………」

それも、今まで見てきたどんな滝を軽々と越える……………圧倒的な滝だった。

感動的にその場所を例えるなら……………横一面に広がるオレンジ色のオーロラ。

直情的にその場所を伝えるなら　　夕暮れの光を映す膨大な水量の大瀑布。

それ以上に表現しようも無い光景だった。

形状は地下水が地層から流れ落ちるのではなく、川の水が直接滝へと流れ落ちる、名瀑。

しかしこんな山の山頂付近に、この水量は……………ありえない筈だ。

流れ落ちる水が滝壺手前で拡散し、橙色の靄となって水面上を覆う。

それらが幻想的な光景を一層引き立たせ、更に上へと昇華させている。

現実とは思えない風景。絶景。そう、見事過ぎる程の絶景だ。

間近でソレを見ていた俺も、顔や腕にかかる飛沫の冷たさに、ようやく現実だと気が付くことができたくらいだ。

それ程までに、他の事柄のすべてを忘れさせるような、圧倒的な光景。

ことわざでも何でもなく、開いた口が塞がらない。

どう見ても奇跡としか、思えない。

……これが神の力ってやつだろうか。

「……あの時……下の山道から聞こえていた音は、これだったのか……」

これは妖精さんに問いかけるのでもなく、独り言のようなものだった。

……あるいは彼女に対して出た言葉だったのかもしれないが……彼女は現在、隠れるようにしてガサガサと荷物を漁っている。残念な事に、心底嬉しそうな表情で財布を品定………してはいない。気のせいだった。

妖精さん等々は関係なく、脳が彼女を見続けることを拒否した結果だろうか。

軽い頭痛に襲われかけ、視線を外す。
そして、もう一度正面の滝に、向き直る。

「……なるほど……そうか、ここ……か。……この場所、だったんだな……」

そして、分かってしまった。

恐らく此処が、妖精さんの目的。
そして、彼女こそが……水を求めて各地を巡り、辿り着いた約束の場所………。

「（……水、か……）」

水……彼女の”力”というものが、それに該当するものなのだろう。

「（……………妖精さん。それで合っているのか？……………此処だったのか？……………」

妖精さんの反応は……………

「（……………そう、か……………そうか……………）」

…これで、約束は果たされたようだ……………。

妖精さんの……………赤い少女の望んだ場所は、ここだった。

……………約束を果たし、辿り着いたこの場所こそが、あの少女にとつての……………

……………そして……………俺にとつての……………。

「（……………終わった……………のか……………）」

……………あれから2年。

長かった。

……………本当に……………長かった。

「…………………………」

忙しい日々、考える暇も無かった事がまぎまぎと、思い出される。

……とは、違う。違うな。

これも、誤魔化してはいけない事だった……筈だ。

「……………忘れようとしていた。」

忙しい振りをして、忘れようとしていた事が、目の前に、よみがえる。

今になって湧き上がるように、再燃するように、瞼の裏に。

胸がほんの僅かの時間、熱を帯びる。

余韻も無く一瞬で消えた、暖かい熱。

今では彼女の力も衰え、言葉こそ伝わらなくなっているが、こうして意思を伝える事ができる。

そして……………この熱の、意味は……………

『ありがとう』

ただ、その一言。

たった、その一言……。

だけど、その一言が……………俺の……………。

「……………っ?……………一条さん?……………」

コレは、嬉しさからのものなのか、悲しさから来たものなのか……分らない。

コレは、見ている物を歪ませ、感情すらも歪ませる厄介なものだ。

そしてこれは……水だ。

ただの……水だ。

昔の俺にとつての水は、澄んでいるか、それとも濁っているのか……その程度でしかなかった。

その好き嫌いは、実は今も大きく変わってはいない……。

なら……これはどっちに含まれるんだろうか……

好きな方に、含まれているだろうか？

それとも、嫌いなものとして……

……とか何とか考えてる内に……おさまってしまった。

「（……な、なんだよ……簡単に、引っ込められるもんなのか？これ……）」

水は……涙は、呆気ないくらい簡単に引っ込んでしまった。

擬音で表すと”ツパ”だ。……”ツパ”と、引いた。

……いや、おかしいだろ。

俺の苦労ってこんなもんだっただか？

もっと色々大変な目に遭ってる気がしたんだが……

涙を誘うような日々があった気がするんだが……なあ……

全部気のせい、だったのか……？

……そんな筈はないんだが……

それとも何か？クサイ事を言い過ぎて、涙にすらドン引きされた

のか？俺……

……それじゃあ、もっと台無しだな……感動とか色々……ペアだ。

……ばあ……。

……ああ、なんか……違う意味で悲しくなってきたな……。

「……？……っ？」

……どうしたんだ？妖精さん。

……『ごめんなさい』って……なんで妖精さんが謝ってるんだ？

妖精さんが焦った様に謝罪をし始めてきた。

最初の方は”変な妖精さんだなあ……”と、内心可笑しくて堪らなかったのだが……

「（……ッ……いい、いいよっ。分かった、分かったからっ。落ち着いてくれ、妖精さんッ）」

あまりに何度も何度も必死に謝ってくるので、逆に心配になってきてしまった。

「（何があったか知らないけどさ。とりあえず今は、この場所に着いた事を言ぼう、な？）」

その説得を受け、妖精さんは落ち着きを……っ……って、今度は、泣き始めてしまった……。

…駄目だ。もうさっぱりだ…。

俺は泣き止まない妖精さんを放置して、もう一度目の前の風景に向き直った。

そして、2年前、あの少女と握手をした光景を思い浮かべ。

同時に、その少女によって見る事になった”最後の光景”を、思い浮かべる。

「……………」

……………今なら、大丈夫……………大丈夫だ。

あの時のように、泣きはしない。

絶望感に囚われることも、もう無い。

むしろ、今なら……………

「……………? ……一条さん? ……どうかされましたか? ……」

いつの間にか彼女が首を傾げ、心配そうにこちらを覗き込んでいた。

その姿は可愛いというよりも……………やはり、綺麗。

そして、ひたすらに神々しい。

……………なるほど、神様だ。

更に可笑しさが込み上げ、笑い声をあげようとしたところで……………

「……………あのさ、神様。一つ頼みたいところがあるんだけど良いか?」

ふと、ある事を思いついた。

「……また、突然ですね……でも、もちろん良いですよ。仮にも私は神ですので、どのような願いでも叶えてさしあげます。何でも言ってみてください。」

流石ゴッドな聖女様だ。

思わず崇拜してしまいそうになる。

……が、今は我慢して、伝えよう。

「俺もここに住みたいんだけど……駄目かな？」

…そして、言うてから気が付いた。

これは同棲を申し込んでいるに等しい言動だ、と。

「(……まず、いッ!?!?)」

見れば、彼女の顔が今までに無く真面目な表情となっていた……。加えて妖精さんも妖精さんで、いつの間にか泣き止み、呆然としていた……。

「ああと、違うんだッ!……気に入っちゃまったんだッ……ってそれも違うッ!?!っ、つまりだな!?!……ずっとこの場所を見ていたいと思っただ。できることなら、此処に暮らして、近くで……」

そして今度は、言っている途中で気が付いた。

彼女が笑っている事に。

……楽しそうに微笑んでいる事に。

それは、まさに聖女のような朗らかな笑顔で。

思わずこちらも笑顔にならずにはいられない、そんな……

「えと、それは無理ですよ？ 貴方はすぐに死にますから。」

……あ、やっぱりそれは変わらないんですか。

妖精乱舞

ここは山頂付近の………^{こけ}苔広場（今、命名）。
適度に保たれている湿気が、とても心地の良い場所だ。

辺りが段々と薄暗くなってきた事に気が付き、俺は頭上に目を向けた。

振り仰ぐと、青々と茂った木々の葉から差し込むオレンジ色の光が、瞼に突き刺さる。薄目に空の様子を見れば、西の空には夕焼け空が広がり、東の空からは深青色の夜空が迫ってきている。

所々に流れる雲は、黄金色に染まり、絶妙なコントラストを空に作り出していた。

時刻は、逢魔時。

パリッ。

視線を下ろすと、そこには先程と変わらず、非現実的なまでの大規模な滝が広がっていた。

ポリポリッ。

時々頬にかかる飛沫に俺は目を細め、息を大きく吸い適度に湿り気を感じた空気を肺を満たす。

キュツキュツ………ゴクゴクッ………

まるで桃源郷のような最高の場所で、俺は正座をし、風景を堪能している。

ゴ、クツ……?……ゴ、キュツ?!

そして、耳を打つ滝の音に

ゴキュゴキュッ!!

癒さ……

バリバリッ!ゴキュゴキュッ!

癒され……

ゴキュゴキュッ!ゴキュゴキュゴキュッ!!

「……………」

ゴキュゴ……………ッ??!!!!

「……………」

……………ゴ……………ゴク……………ゴク……………。

癒されている。

俺は周りに向けていた視線を、正面に戻した。
そして、こちらの様子を伺いながらも、飲食を続けている青い幼女の姿に呆れた。

頬に食べ物を詰め込むハムスター……と、可愛らしい比喻できれば良かったのだが。

残念ながら、今の青い幼女は瞳をキラキラと輝せながら　瞳をギラギラに血走らせているため、どう補正をかけて見ても、手に入れた獲物を逃がさまいとするハイエナに見えてしまう。

悪く見て餌を貪り食らうブタ……は少し言い過ぎな……つまり、そんな姿だ。

しかしながら、幼女の姿からは食べ物に困るような生活をしていくようには見えない。

腹だけ異常に出ているという事もなく、逆に贅肉が付き過ぎているわけでもない。

栄養状態が良いのか肌もツヤツヤで、至って健康な身体に見える。それでも、先程のスポーツドリンクに麻薬が入っていたかのようなガッツキ具合を見てしまうと……普段何を食べて生活しているか、心配になる。

……どうやらあの財布は渡しておいて正解だったようだ。

ポリポリ……コクコク……

ともあれ。

地面に散乱した菓子袋とスポーツドリンクを挟み、俺と同じように地面に腰を下ろしている青い幼女。奇抜な見た目以外、何処にでも転がっていきそうな普通の幼女だ、が……しかし。

何を隠そうこの幼女は神様　らしい。

「……そんな姿になったけど、結局お前は神様なんだよな？さっきの女性と、お前は同じ………には、やっぱり見れないな。………
………あーそうか、お前、実は偽物だろ。偽物だな？本物はどこに隠した？彼女をどこにやったんだ？！今すぐ吐くんだ！！幼女！！」

???…コク、コク………

不審者を見る目をしつつ、首を傾げる青い幼女。

言葉の意味がいまいち分からなかったようだ。

………と思う俺も、言っている事が途中から無茶苦茶になり、困惑している。

まあ……こんな意地汚いちまっこい姿を見れば、さっきまで持っていた筈の”どうやら神様のようだ”という考えも、思わずそこらの小汚い公衆便所に実物ごと洗い流したくなるのが人情、というものだろう。

仕方がないことだ。

たとえ、背丈や服が縮む現場を見ていたとしても、”こいつは別人だろ”という結論に辿り着くのも、無理もない。

………そういえば来る時にも思ったが、この山の付近には公衆便所が無いんだよな。

いや、それどころか人工物一つすら見当たらなかった気もする。

すると、この幼女もどきは一体どこで………。

と、また違った方向に思考が飛びかけたところで、目の前の幼女が反応す

「　　??？」

あれ？今一瞬、滝が　　。

「おふぁふえぶぁっ！ー！」

「ッ？！ー！」

反応すると同時に、こちらに向けて攻撃を仕掛けてきやがった。

「　あすみませんッ……………お前は、止めてください！私は神様ですよ！ー！」

スナック菓子やらなんやらの不純物が混じった汚物が、俺に付着する……………という事は、幸いな事に無かった。

安心してほしい。

それらをあらかじめ予測していた妖精さんの助けによって、回避することに成功していたのだ。

それよりも……………今、滝の音が消えたことが気になる。

一瞬だけだったが、滝の水の落下が止まっていたようなのだ。

「（……………一体どういう……………って、そういえば。）」

そんな無粋な真似が出来る奴っていったら……………この幼女しかないだろうな。

「……………そうか、悪かったな、神様。」

変なテンションで強張っていた身体から、一気に肩の力が抜けた。

「どうやら、この幼女は彼女と同一人物で神様のようだ。」

もう何回目の納得なのかは忘れたが、とりあえず神様で納得した。

となると、ついさっきの俺が死ぬ、という死の宣告も認めることになってしまう。

嘘を言っていないければの話だが、まあ妖精さんが特に否定はしていなかったから、本当の事なんだろう。

「そうそう、妖精さんといえば……」

「そういえば、まだ聞いてなかったな。あんたの……神様の名前はなんて言うんだ？」

「……………神、です。」

青い神は焦った表情で、両手をこちらに向けてふらふらさせていた。

「？それは分かったよ。お前は神様だ。それで名前「神です！」……おい。」

これは嘘だろう。

直感も、そして妖精さんも、そう告げている。

それと、今の青い神の挙動に何か嫌な予感を覚えた。けれどこちらはなんとなく予想がついている。

つい溜め息が付きたくなるような下らないものだが、十中八九当りだろうな。

「そんな名前があるか。仮にも神様だろ。嘘は付くなよ。」

頭では……ないな。

肩でも、ないようだ。

一体どこに？……と、思ったところで、頬の辺りに鋭い熱が一瞬だけ沸いて、引いた。

これは妖精さんからの緊急信号だ。

「むうっ！！……馬ッ鹿じゃないですか？！！神さまだつて嘘ついても良いんですよ！！嘘をついていけない、なんて規則も”るーる”も無いんですから！！！」

うわ、こいつ開き直った。

俺は呆れながらも、手でゆっくりと、頬に触れて……手の平を、見て……はぁ。

「ッ！……あ、貴方のような人をなんて言うか知ってますか？！！”ていのう”っていうんですよ！！つまりですねッ……つまり、ですねッちょっと用事を思い出しましたッ！！！」

そう告げるやいなや、幼女はスポーツドリンクを片手に颯爽と走り去って行った。

追いかける間どころか呼び止める間も無かった。

逃げ足が速い……というか速過ぎた。青い残像みたいなものが見えた。

「……何か、言えない理由でもあったのか？……てか、なんで俺がこんな目に……」

ぶちぶちとぼやきながら、頬に付いていた菓子の残骸を払い落とす。

反射的にその物体を目で追いかけてそうになったが、精神衛生上のため抵抗しておくた。

残骸はべちゃりつと嫌な音を立てて地面に落ちる。

謎の悲しみと敗北感を味わいつつ、俺はもう一度、空を見上げた。

一層深みを増した頭上の空は、吸い込まれるような色合いを帯び始めていた。

太陽の位置からして、月が出るとしたら丁度滝の上辺りからだろう。

「……………見えないか。」

まだ見えないが、月も夜も、もうすぐそこまで迫ってきている。すぐに辺りも暗くなると思う。

とりあえず俺は……………

顔、洗ってこようか。

臭いし。

水際に膝を付き、屈みこむ。

透き通った水をすくい上げ、まずは手を洗う。

冷たい。

もう一度水をすくい上げ、今度は勢いよく頬にかける。

やっぱり、冷たいな。

それを何度も繰り返していると、意味も無く笑いが込み上げる。

泳ごうか？

いやいや、流石にこの冷たさは危険か。さつき

も溺れたし。

それじゃ飲もうかな、と思ったところで、ふと、動かしていた手を止めた。

瞼を開けて、視線を真下に向ける。

見えるのは揺らめく水面。

そこに映るのは

「妖精さん……………なんて、見えるわけないよな。」

俺の姿だった。

残念だが、当たり前だ。

俺以外の姿が映っていたら、とつくに悲鳴を上げている。

妖精さんの姿が映るとしても、少なくとも水面には映らないだろう。

砂漠とか真夏の糞熱いアスファルトの上とか……………。

まあ、そんな熱そうな場所にしか映らないと思う。
……妖精さん自身も”その通り”と言っている。

もう何度か、顔に水をぶっ掛ける。

……もうそろそろ戻ろうか。

汚れも全部落ちただろうし、気分もある程度良くなった。

そう思いながら、最後にもう一度、水面に映る自分を確認する。

おー相変わらず……怖ええ顔だ。

「……なるほど。ゾンビか。」

無愛想なんて生ぬるい。

お前本当に生きてるのか？って聞きたくなる程の、無表情極まりない顔。

それに加えて……意識せずに笑えば、嘲嗤っているようにしか見えない笑顔。

俺はフレンドリーにしてるつもりなんだがな……と、指を使って無理やりに目を細める。

どう頑張っても、苦笑するのが精一杯、といった所だ。

………小心者が見れば、もしかすれば般若のように映るかもしれない。

そういえば、あの時も

「……いや、これはわざわざ思い出すこともない、か。」

とりあえずこの微妙な気分も含めて、全部こいつのせいだ、と納得しておじつ。

「このドロドロに濁りきった、瞳のせいだと。

やつ当たり気味に水面にメンチを切る。

「うおっ怖ッ、睨み返され……………」

……………俺は、一体なにをやってんだろ。

まあそれでも不便ではないんだ。

怖がられることはあっても、舐められるようなことは無かった。
なにかと脅……………お願いするときにも、便利だったからな。

……………と、訳の分からん言い訳も終わった所で、とりあえず、自己紹介でもしておこうか。

……………??…は???

” どうしていきなり自己紹介？” ってか。

……………そんな事聞かれてもだな。

こんな事できるのも、最後になるだろ？

あの幼女が言うには俺、もうすぐ死ぬらしいからな。

それに、今まで一度もしたことも無かっただろ。

休日以外はだらけきってたからな。

だから……………記念か、けじめみたいなもんだよ。

……………ええ???

” 誰に自己紹介するの？” って……………おいおい。正気か？

誰も何も……妖精さん相手に決まってるだろ。

一方的に思考とか記憶覗いてるだけで、俺からは一度も自己紹介したことないし。

さっきも言ったけど、最後だからな。妖精さんには色々が恩があるし、世話にもなった。

だから……で、え?!

おおおいつ!!?!

なんでまた、泣き出すんだ?!

なにか俺が悪い事ッ

って、ああー……引っ込んだ。

……意味がわからんな……。

まあ……思考は勝手に読んでるだろうし……とにかく、自己紹介を始めようか。

俺の名前は一条一月。

性別は、男。

独身。

誕生日は2月13日。

年齢は20代後半。
が、何度か二十歳前後に間違われる事がある。
これは別に自慢でもなんでもない。

趣味は名水探しと水遊び。

好きな物は綺麗な水と旨い水で、嫌いな物は濁った水と腐った水だ。

俺の自慢……というか特徴は名前が珍しいということが1つ。

いちがっ
一月と書いて『いつき』と読む。

事前に教えておけば、ほとんどの人に憶えてもらえる珍しい名前だ。

それにしても、2月の生まれでどうして”1月”なのか……今でも謎だ。

しかもこの謎は既に迷宮入りしてしまっている。

2つ目は、顔。

年齢が間違われることもあって、顔の作りは童顔の分類には入っていると思うが……。

とにかく、怖い。

意識せずに正面から見れば、とりあえず相手を黙せられる。

続いて睨むと、財布が出てくるんだ。…凄いだろ？

しかも、そこで俺が慌てると……どうしてか警察に通報されるんだ……悲しいだろ？

そんな感じで色々問題もあるが、名前と同じように忘れないって
いう点では、自慢なんだ。

最後は、しぶとね。

喧嘩が強いとか、頭が良くて立ち回りが良いとか、そういう事は一切無い。

単純に、しぶとい。それだけだ。

死ぬときには死ぬと思うが、基本的にゴキブリのように逃げ回ることができ、ゴキブリのような打たれ強い体を持っている。

生まれつき、もあるが何よりこれは妖精さんが鍛えてくれた成果だ。

だから、一番誇れる自慢な……………あぁ、またか……………。

とりあえず簡単なものだったけど、こんなところだ。

「あと少しの間だけど、よろしくな。妖精さん。」

そして俺は号泣している妖精さんと硬い握手を交わした。もちろん心の中で。

やろうと思えばできるもんだな　と苦笑し、立ち上がった。

空を見る。

一層暗く、深くなった空を、見上げた。

月は、まだ見えない。

「……………ふー。」

さてと、これからどうなるんだか。

青い神様と俺は、再び向かい合う形で地面に腰を下ろす。

そしてまだ食い足りないのか、スナック菓子の袋に手を伸ばしかけた青い神様の手に

「わかり、ましたっ！わかりましたから、睨まないでくださいっ！」

視線を突き刺し、静止させる。

青い神は、ようやく真剣に話しをする体勢に入った。

「これから、先程の話を続きをしたいと思いますんですけど……落ち着いて聞いていてくださいよ？今度は暴れたり……襲いかかって来ないでくださいね？」

こんな前振りをされて落ち着けというほうが無理だろう。

まあ、実際に落ち着いてはいるが。

「何言っただ。さっきのはお前が勝手に逃げただけだ。暴れたりも襲いかかったりもしない。……そんな趣味もないしな。」

馬鹿も休み休み言え、と苦笑し

そこでふと、青い神を見れば、警戒するようにこちらを見せていた。

「……その事ではありません。私が言っている”さっき”は、一条さんを気絶させた直前の事です。」

「はぁ？お前が……神様が気絶させたって？俺をか？……どうして？」

そういえば気絶していたこともあったな、と理由を問う。

「……言っただじゃないですか。一条さんが襲いかかってきたからです。」

……このアホ少女は、一体何を言っているのだろうか？

「何を馬鹿な事を……俺がそんな事する筈が無い……だろ……」

「……………」

……無言で、俺を見据える青い神。
肌を感じる空気が、若干というか、かなり危険になっている。

「……………おい……まさか、本当に？」

「……………」

おいおい、ついに俺は無意識に少女を襲うようになってしまったのか。

……などといった笑えない冗談ではないようだ。
青い神の瞳からうかがえる警戒心は、常軌を逸している。

「身の危険どころか……命の危険を感じましたよ。冗談ではなく本当に。」

青い神の姿が、変化する。

「……………ですから私は……………」

瞬く間に”彼女”となったその手には　　深い青色の球が浮かんでいた。

「ですから私はあの時、貴方に気絶していただいたのです。」

宙に浮かぶ球体に、俺は経験的にそれが水であると、認識して…

……………

「……………その水で、か？……………どうやって。」

直感的に、それが途轍もなく危険なものであると感じ、引き攣った苦笑を浮かべた。

「興味深々といった様子ですね。試されますか？」

それをどう捉えたのだろう、彼女はそう言って、聖女のような微笑みが浮かべた。

「とても簡単な事ですよ。　　このように、分散させて　　」

彼女の持つ水球が、宙に溶けるように消えていき

「　　集めて　　」

その手から離れた、ある一点で、急速に元の形を取り戻し

「……………ッ！！？……………ッッ！！！！」

俺の、呼吸を止められた。

「溺れていたいただきました。」

肺に繋がる気管を、塞がれた。

水球が、俺の体内で、再形成された。

「ッ、ッ！！！！（息が、できねえ！！）……………ッ、ッ！！！！（青い神ッ、分かったからやめてくれ！）」

叫ぼうにも、言葉が出ない。

仕方なく、身振り手振りで彼女に助けを求めるが……………

彼女は、ただ冷静に、様子をうかがっている。

肺が小刻みに上下運動を始め、酸素を求めてくる。

「……………ッ、ッッ？！（何、してんだよ？！）……………ッ（マズ、いッ）……………ッ！（息、が……………ッ！）」

水を吐きだそうにも、位置が位置のため力が入らない。

手で掻き出そうにも、俺の手では届かない。

喉の奥に異物があると分かっても、取り出せない。

苦しい。

ひたすらに、苦しい。

嘔吐感は湧き出てこない。

意識も明瞭に保たれている。

そんな状態で一秒、一秒先に迫ってくる死の恐怖に、身を震わせる事しか、できない。

「…………ツ！…（ダメだ！）…ツ！（妖精さんなんとかしてくれ！）…………ツ！（ツ頼む！！）」

意識を向ければ、妖精さんが何かと手を加えている事がわかったが
しかしこの異物は、妖精さんの手でもどつすることもできないようだ。

全身の筋肉が、痙攣し始める。

「ツツ？ツ…？…！！（死ぬのかツ？俺はここで…？…！！）」

無音の苦鳴を喉から迸らせ、彼女に問う。

それでも彼女は…………何も言わない。

冷静に、冷静に、傍観するだけ。

彼女の考えていることが、何も、分からない。

…………意識が、段々と不明瞭になっていく。

「…………ツ（死ぬ、のか？）…………ツツ、ツツ（はハ、ツハハは）」

口が自動的に自嘲の笑みを刻み……………そして。

「……………こんなところです。大丈夫ですか？」

肺の気管から、異物が消えた。

水が、消えたッ！

「　　ッッ！！！！　　ハッアッ！！！！ハアッ！！！！！」

呼吸が再開される。

強奪するように、無理やり肺に酸素を送り込む。

「この空気をそんなに美味しそうに吸うなんて……なんだか照れてしまいます……。一条さん、今回は気絶はさせない方向で試しましたが、気分はどうですか？バッチリですか？」

そして、この笑顔だ。

「……ふざッけるな…ッ！！苦しいに決まってるだろッ！！死ぬ直前だったんだぞ？！！！！」

もう、この笑顔には、騙されない。

こいつは神様かもしれないが……悪魔のような奴だ。

というか、悪魔そのものだろ、こいつッ。

「っえ？……それでも、あの『水』は治療の効果も含まれていましたから、今は大丈夫ですよ？喉元がスッキリになっていませんか？」

いきなりアップになった彼女の顔に、俺は動揺しながらも。恐怖
していた。

微妙な角度で傾げられた首、桃色に染められている頬、そして、

この笑顔。

計算されつくしている。その全てが悪魔の仕草だ。

こいつは人間ではない。迫害すべき危険な化け物だ。

妖精さんも”離れる”、”死ね”、”殺す”といった呪詛のような熱の波動を彼女に送っている。

「???…何か、熱いですね。もしかして既に風邪でもひかれましたか?…風邪は、怖いですからね。早めに治した方がいいですよ?…頭は、痛くないですか?」

そして、慌てて額に添えられた彼女の手に、俺は動揺しながらも……

歡喜していた。

そう、俺は歡喜していた。

柔らかく暖かい手のひら、潤んだ瞳、絶妙な角度で顰められた眉。そして、この儂げな笑顔ッ!

神によって計算されつくされた黄金比。その全てが天使の仕草だ。この方は断じて人間などではない。崇拜すべき聖女様だ。そして妖精さんも……妖精さんも……?

……どうしたんだ、妖精さん。……そんなに不貞腐れて。

……なに?……”さっきまで悪魔とか言っつて、散々貶してたじゃない?”ってか?

悪魔とか……正気か?

そんなこと俺が彼女に向かって言うはず無いだろ。

……大丈夫か?幻覚でも見ていたんじゃないか?

無理そうなら……そうだな、俺が死ぬまでなら、看病してやるぞ?どうする?

……あ……お、おい？どうしたんだ！？

妖精さんが、今度は痲癩を起したように胸の内側付近で暴れはじめた。

痛さも熱も感じないが、とにかく見境なく狂ったように暴れ回っている妖精さん。

今までは息を潜めてたように静かだったのに……流石に自由過ぎるぞ。

「風邪はひいてない。……いや、今治ったから、大丈夫だ。」

そう言っただけは、翳かきされた彼女の手を丁寧に退かした。

紳士的とは呼べない動作だったかもしれないが、無い知識を総動員したものだっただけ。

悔いは無い。

それにしても……踊りたい年頃なんだろうか。

妖精さんの様子がおかしい。更に暴れまくっている。

「え？そんな、すぐに治るわけが……あれ、本当に熱が引いてますね？」

目を見張りつつ、不思議そうな表情で一步下がる聖女様。

若干笑顔が引き曇っていたように見えたが……

……うむ。やっぱり神々しい。

この山の付近の村か町とかに、彼女を祀った神社でもないかな。御札とか木彫りの神像とか売ってたら、記念に買って逝きたいんだけどな……。

いっそのこと、俺が作るってのもありかも……いや、無理か。

正確に彼女の姿を表現できるほど才能は無いし、何より時間が無い。

……惜しいな。

あ、妖精さんなら、もしかしたら人形作りとかできないかな。

……ミイラ作りなら得意……とか返されたら本気で反応に困るから、聞かないでおうが。

「一条さんには驚かされてばかりですね……いえ、本当に予想外の連続ですね。」

いつの間にか、ウンウンと頷きながら、興味深そうに俺を眺める聖女様。

さあもつと見てくれ と、暴走しそうになる思考を抑えて、

俺は疑問に思った事を問う。

俺は紳士だからな。

「……驚かされてばかりって……さっき言ってた神様に襲い掛かったって事か？」

俺にはそんな覚えは無いのだが……彼女を見ていればそれも無理もないかな、とも思えてくる。

仕方がない。

結果としては間違っているが、男としては”良くやった”と自分に褒めても良いと思う。

……やっぱり、紳士までの道のりは遠いようだ。

「それもありますけど、違います。まずですね、この山に入れた事が凄いいことなんですよ。」

……山に入れた？

普通に近くの駅まで電車で来て、あとは歩いて来たただけだけ。

「そうか？確かにちよつと邪魔くさい柵とかはあったけど、乗り越えれば普通に入れたぞ？」

そついえば自殺を引き留める言葉とかが書かれた札も、あちこちの木に掛けてあった。

早まるな、とか。都会で死ぬ、とか。森を汚すな、とか。妖怪に注意、とか。

とにかくバラエティ豊富に沢山掛けたあったな。

「いえ、柵とかそういう物では無くてですね。……私の結界が張ってあったんですよ。近づくと嫌悪感が湧いてくるような簡単なものでしたけど、それでも相当強い意思を持っていないと通れなかった筈です。」

軟弱な方でしたら、通る時には発狂してますよ？

と、困ったような笑顔を向けてくる聖女様。恐ろ美しい。

そんな事言われても、何も感じなかったし、それよりも……

「……そんな危険なもの張っておくなよ。なんでそこまでする必要

あるんだ？」

「私、人見知りなんです。」

……理由としては不十分だとおもぅが。

「……それに、ここ付近で作られる水は、私が管理しているんですよ。つまり、この山は私の縄張りのようなものです。……勝手に縄張りに侵入して、私の水を汚そうとする人達を、一条さんはどう思われます？ 追いつ返すべきだとは思いませんか？」

そう言っって少し頬を膨らませ、憤慨する彼女の姿は
うん、天使だ。マジで木彫り人形が冥土の土産に欲しい。

「それなら仕方ないな。そんな奴らは処分するのが当然だ。疑って悪かった、納得したよ。」

「ですよねっ！ わかって頂けて嬉しいです、一条さんッ！」

そして俺と青い神様は、ガシツと握手をする。

……なんだか照れるな　　と思う前に、手のひらが痛くて、泣きたかった。

これは間違いなく、妖精さんの仕業だ。

しかもまだ飽きないのか、暴れ続けている。

ここまでくると……遅れてやってきた反抗期、というやつだろうか。

「……やっぱり変わってますね、一条さんは。」

気が付けば彼女は手を放し、少し困り顔でこちらを凝視していた。

簡単に言えば変人扱いされている。

なんてことだろう……。

これも間違いなく、妖精さんのせいだ。

本気で、泣きたい。

「どうして、そこまで魂をボコボコにされて、平気でいられるんですか……？」

「……え？」

いきなり彼女の口からでた言葉に、一瞬唖然として、俺はすぐに納得した。

これは、あれか。

神様にも見えてるのか？

「どうしてと言われてもだな……慣れたからとしか。それより、見えてるのか？」

「？……ええ、見えてますよ。はっきりと見えています。」

よくよく考えれば、神様なんだから見えていて当然だ。

「……確認の為に聞いておくが……何が、見えるんだ？」

「一条さんの魂と　一条さんの魂に取り憑いている、私の……友人、ですね。」

「……友人か。」

……友人か、なるほど。

だから妖精さんは彼女に合いに来たかったのか。
だから、ああまで必死に、何年もかけて……

過去に死別したのか、生き別れになって、再開したかったのか。

と、思ったが。

「……………」

どうやら、違うようだ。

目の前の彼女の視線が、鋭いものに代わっていた。

鋭い、どころじゃない。

敵意はもちろん、殺気も少し見え隠れしている。

真意を見定め、場合によっては制裁も厭わない、というその瞳その姿は、神様というよりも戦乙女のように見える。

そして、妖精さんも妖精さんで、ピタリと暴れるのを止めて、彼女の動向に警戒している。

その姿は、妖精というよりも………やっぱり妖精さんだった。

……彼女たちの関係は、かなり複雑なものだったようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5213w/>

ドライツ

2012年1月10日03時54分発行